桑原専慶流いけばなテキスト

「器と花の痕跡」

日本のいけばなはどのようにしてできてきたのか。
絵巻、壁画、レリーフなどに残された、器と花の
痕跡を探す旅。

立花時勢粧の器

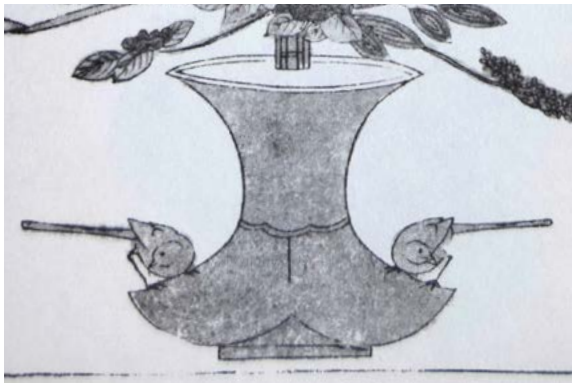
「立花時勢粧」には118の図が収められているが、その器は96種類もある。出版された元禄元年頃には、華やかな世相と立花の流行とが相まって、立花瓶にも様々な形や新しい意匠をこらしたものが作られた。

自由奔放な自然の息吹とその調和を表現しようとした富春軒仙溪。特に行や草の立花には、それに呼応するような変化に富んだ器を選んで使っている。

器の形だけを見ても様々な形態のものがあるが、立花瓶の遊びの部分として「耳」に注目してみよう。

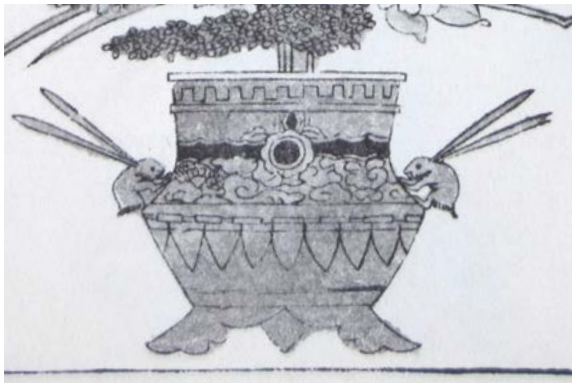
図① 蟷螂
図② 魚
図③ 象
図④ 鳥
図⑤ 兎
図⑥ 蝶

これらの意匠に釣り合う躍動感が花形にも求められることになるが、どんな花かは、それぞれの図で確かめていただきたい。



第六十六図　テキスト No.655

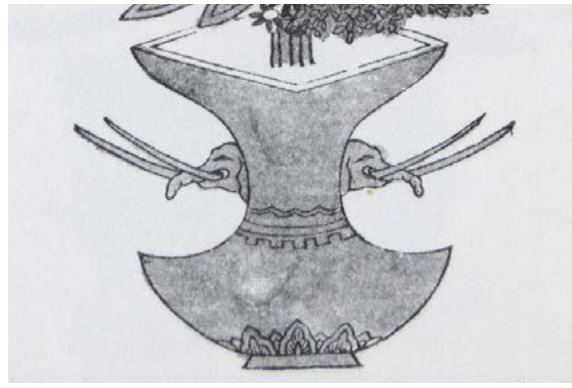
第七図　テキスト No.613・648（に掲載）



第七十図　テキスト No.674

第二十五図　テキスト No.647

第八十七図　テキスト No.654



第五十七図　テキスト No.673

立花時勢粧の器 ②

「立花時勢粧」の立花図に描かれている立花瓶・砂鉢は96種類ある。前号につづき「耳」に注目してみよう。

図① 象

一番最初の「真の花形」の器。第七十九図・第八十図の「真の対の花」にも使われている（テキスト６１５）。

図② 象

この象は鼻の形が特徴的。「立花時勢粧」には象の意匠の器が６種類ある。

図③ 龍

この図は冨春軒による「除真の内草の花形」である。他にも第百九図・第百十図の松一色の立花（どちらも冨春軒作）に使われている（テキスト６３６）。冨春軒にとって特別な器の一つといえる。

図④ 龍

図⑤ 獅子

第八十四図（テキスト６１５）と共に「草の対の花」に対で使われている。

図⑥ 唐子

図⑦ 巻葉（蓮？）

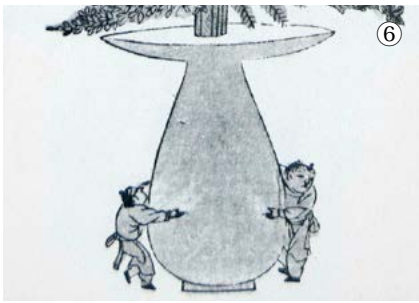
図⑧ 竹

図⑨ 竹

図⑩ 竹

⑧⑨⑩図はどれも真が松の立花だが、それぞれに個性的な松なので見比べると面白い。

第一図　テキスト No.612・633 に掲載



第六十図　テキスト No.661

第二十四図　テキスト No.640

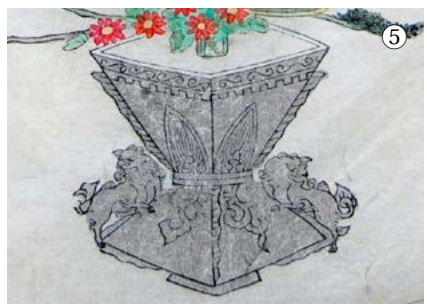
第五十九図　テキスト No.674

第二十一図　テキスト No.625

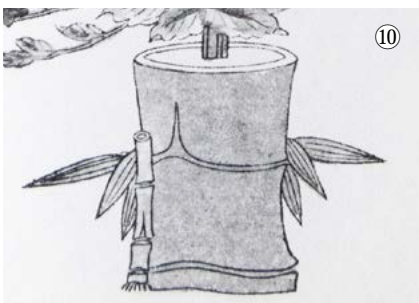
第八図　テキスト No.613

第五十八図　テキスト No.669

第十二図　テキスト No.622



第八十三図　テキスト No615・637



第四十一図　テキスト No.641

立花時勢粧の器　③

図①　瓢箪

瓢箪は古来より縁起の良いものとされてきた。第八十五図は冨春軒の合真の立花。合真は婚礼の席で立てる特別な様式で、それに相応しい器といえる。

図②　藤の花

第十六図の立花は萱草の真。

図③　紐

宝袋を模ったものと考えられる。第八十二図（テキスト６１５）と「行の対の花」に使われている。

図④～⑩　様々な形の耳

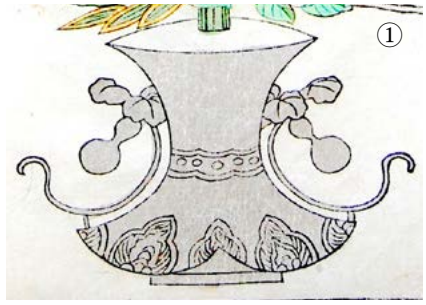
図⑥の器は第三十九図（テキスト６６２）にも使われている。

図⑦の器は「耳口」と呼ばれる。帯状の耳が器の口の端から出て腰に繋がる。

図⑧は器の形も耳の形も独特である。第六十三図「苔松に藤」の作者は服部三郎右門となっているが、初版では作者が書かれていない。第九十図「竹の胴」（テキスト６５６）と第九十八図「杜若一色の行」（テキスト６６３）にも同じ器が使われているが、どちらも桑原次郎兵衛作。次郎兵衛好みの器といえるか。

図⑨は冨春軒作の「菊一色の行」。珍しい耳の形である。

図⑩は鐶耳。「鐶」は金属の輪。遊鐶と不遊鐶がある。図⑩は遊鐶。



第八十五図　テキスト No.675

第二十九図　テキスト No.657

第十六図　テキスト No.622・668

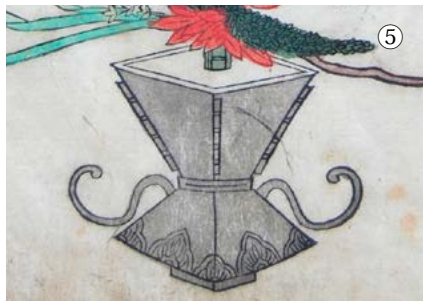
第五十四図　テキスト No.639

第八十一図　テキスト No.615・638

第六十三図　テキスト No.661

第七十三図　テキスト No.653

第百四図　テキスト No.672



第九図　テキスト No.622

第二十六図　テキスト No.663

立花時勢粧の器　④

「立花秘傳抄 四・花瓶の事」（テキスト619参照）には

「花瓶図を考えるに、唐に花瓶と名付くる物なし。今日本に用いる所、唐の酒器なり。」

と述べられていて「唐の器」の絵が添えられている（図①）。そこで、立花瓶のルーツともいえる中国の青銅器の歴史をみてみよう。

①

青銅とは銅と錫の合金で、中国では紀元前3100年頃に石器時代から青銅器時代に移行したと考えられている。紀元前1600年頃に殷（商）王朝が成立してからは、徐々に青銅の鋳造技術が発達し、その後の周、春秋時代まで（紀元前400年頃）が青銅器時代に相当する。

殷や周の時代、青銅は貴重な金属で、王や貴族が権力の象徴として主に祭祀の器物を青銅で作った。宗廟に酒を供えるための「尊」も青銅で多く作られている。それらの表面に邪気を払い神霊との交信の場に相応しい畏怖を抱かせる獣面装飾が施されているのも特徴的である。

時代は下って日本の江戸時代前期に出版された百科事典「訓蒙図彙」にも「尊」や「觚」など中国伝来の器物が絵入りで紹介されている（図②）。初期の立て花はそれら中国の青銅器に立てられたものと考えられるが、尊や觚といった口の広がった酒器を選んだのは何故だろう。今では水際の美しさのためと理由を見つけることができるが、広口の器に敢えて花を立てた最初の思いがどんなものだったのか。もしかすると、中国で古代から神霊との交信に使われた祭祀用の酒器を使うことに意味があったのかもしれない。

立花よりも以前。立て花が生まれたとき、なぜ広口の器だったのか、なぜ藁の束に立てたのか。立花のルーツについて探ってみたい。

訓蒙図彙

中村惕斎によって寛文6年（1666年）に著された図入り百科事典（類書）。全20巻。

天文・地理・居処・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獣・禽鳥・龍魚・蟲介・米穀・菜蔬・果蔬・樹竹・花草を絵と文で紹介している。

②

図②：国立国会図書館デジタルコレクションより転載

『慕帰繪々詞　巻1』より　　覚如13歳、延暦寺の宰相法印宗澄に天台を学ぶ。

『慕帰絵詞』

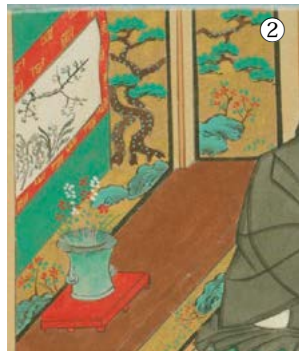
室町時代初期に描かれた『慕帰絵詞』（1351年）には、当時の僧侶の暮らしぶりが克明に描かれている。

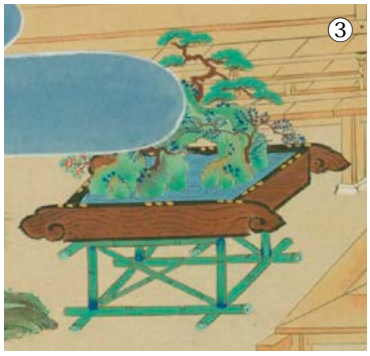
『慕帰絵詞』は浄土真宗の開祖親鸞の曾孫にあたる覚如（1271～1351）の伝記絵巻。西本願寺に伝わる貴重な絵巻だが、大正時代に模写されたものが『慕帰繪々詞』として国立国会図書館デジタルコレクションで公開され、インターネットで誰でも見る事ができるので、絵の細部までつぶさに確認できる。

絵巻の人物一人一人の仕草や表情の豊かさに思わず見入ってしまう。衣服、食事、住まい、遊び、行事、風俗が描かれ、鎌倉時代末期から南北朝頃の様子をリアルに伺い知ることができる。

さて、いけばなの歴史から見ると、最古の花伝書とされる『花王以来の花伝書』が1486年とされるので、それより130年以上前の描写として眺めることができる。（ただし慕帰絵詞巻1、巻7は足利義満の時代に紛失し、1482年に作り直されているので、制作年代による描写の違いがあるかもしれない）

巻8には京都大原の勝林院が描かれ、本尊の阿弥陀如来の前机に枝を挿した一対の華瓶が見える。（図⑧⑨）





『慕帰繪々詞　巻3』より　　奈良興福寺一乗院にて法相を学び17歳で出家・受戒ののち行寛に学ぶ。

⑥

『慕帰繪々詞　巻5』より　　歌会を催し打聞（歌を書き留める）をして歌集「閑窓集」をつくる（正和4年）。

今でも阿弥陀如来に供える華瓶には香木としての榕（しきみ）の枝を挿すが、これはその昔、瓶の中の浄水を清らかに保つ意味で花や香木で器の口に蓋をしたのが起源だそうだ。

巻5の歌会では板の間の奥に3幅の軸が掛けられ、それぞれの前に一対の花瓶と香炉が敷板に置かれている。真ん中の軸は歌聖（かせい）柿本人麻呂だろう。広口の花瓶に生けられているのは高野槙（こうやまき）か。（図⑥⑦）

巻1と巻3には盆石や箱庭が描かれている（図①③④⑤）。台の上に自然の景色を再現する飾り物は平安時代に「州浜（すはま）」と呼ばれ貴族の間で流行した。盆石、盆景、盆栽の起源は中国だが、石や植物で神聖な空間を作ろうとする行為は、その後のいけばな誕生に繋がっていると思う。

図②の床の間には塗の台の上に青磁の鉢に紅白の花と細い葉が見える。はたしていけられたものか鉢植か。この巻1は紛失したのち1482年に描き直されている。書き直された頃にはこのような床と床飾りがあったことが想像できる。（つづく）

⑦

⑧

⑨

『慕帰繪々詞　巻8』より　　貞和2年、大原の勝林院五坊を尋ねる。

国立国会図書館デジタルコレクション『慕帰繪々詞10巻』鈴木空如・松浦翠苑　模　より転載 ↓

『慕帰繪々詞　巻8』より　　貞和4年（1348年）春、桜を花瓶にたて置き、善如と覚如が互いに歌を贈り合う。

『慕帰絵詞』つづき

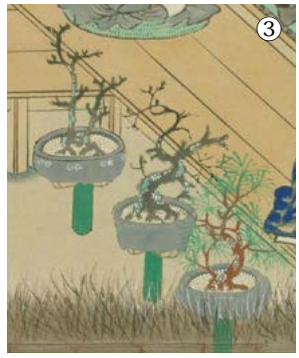
仙溪

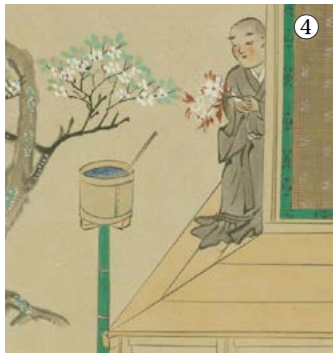
『慕帰絵詞』（1351年）には鎌倉時代末期から室町時代初期（南北朝頃）の様子がリアルに描かれているので、その当時、花をいけることがどのようになされていたかを窺い知る手がかりになる。

巻8では、青磁の大きな花瓶に姿美しく一本の立派な桜がいけられている（①②）。覚如の孫（のちの浄土真宗本願寺派第4世宗主　善如）が、自分の数え年16歳となる日、外の強い風で散ってしまいそうな桜を少しでも長く見ていたいと手折って部屋にいけたものだ。その美しさに見入る祖父の覚如。歌の中で「立て置く花」という言葉も使われている。また、卓の後ろは板戸で、軸を外して花を真ん中に置いているのが興味深い。

続いて巻9からは二つの場面を紹介しておこう。一つは貞和6年正月21日、13歳の若さで病没した光長（覚如の孫、善如の弟）の初七日法会の場面。縁先に青竹を立てた台に置かれた盆栽が3つ並んでいる。正月の設えか、もしくは法会の演出か（③⑤）。

また、同年2月の桜の季節、後室善照尼の墓所に詣でる覚如。経木の裏に恋慕の情を歌に詠む場面では、手折った桜を手に持つ若い僧の姿が（④⑥）。お墓に供える花か、はたまた覚如を慰める心遣いの一枝か。手に持つ枝をこの後どうするのか。670年前のこの瞬間に思いを馳せるのも一興である。





『慕帰繪々詞　巻9』より　　貞和6年1月、光長初七日の法会。

『慕帰繪々詞　巻9』より　　善照尼の墓参で西山久遠寺へ。

国立国会図書館デジタルコレクション『慕帰繪々詞10巻』鈴木空如・松浦翠苑 模　より転載 →

『春日権現験記　巻11』より

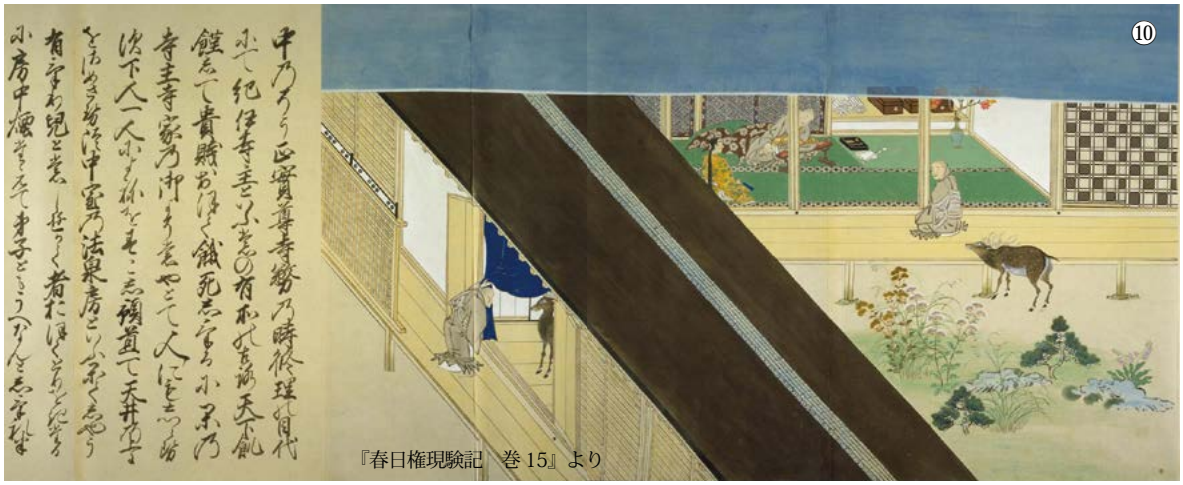
『春日権現験記絵』　仙溪

鎌倉時代後期の『春日権現験記絵』（1309年）もデジタルコレクションで模写が公開されている。左大臣・西園寺公衡が藤原氏一門の繁栄を祈願するために春日明神から受けた加護と霊験を綴った絵巻物で、当時の習俗を垣間見ることが出来る。

8世紀からの春日明神に纏わる様々な出来事が描かれているのだが、中でも奈良興福寺で行われた維摩会の描写（⑦⑧）が興味深い（1159年？）。講堂の三尊仏の前卓には華瓶に立てた花が供えられ、また老僧と菩薩が向き合うその前にも同じ華瓶が置かれている。そしてその菩薩像は手に花を持ってまさに今花を挿そうとしているかのように見えるではないか。（巻11）

巻15には、部屋の隅に紅葉した楓の枝が挿された青磁の花瓶が見える。時は元仁元年（1224年）11月、夢の中に鹿が現れて病が癒え、大切な仏事を遂げることができた僧の話だ。鹿は春日明神の使いであり象徴として描かれているが、目を引くのは花瓶に挿した楓だ。

遡って描かれた絵巻の描写はそれぞれの時代を正確に描いていないかもしれないが、少なくとも鎌倉後期にどのように花瓶に花が挿されていたかを考える貴重な資料である。



『春日権現験記　巻15』より

国立国会図書館デジタルコレクション『春日権現験記20軸』板橋貫雄 模写　より転載 ↓

絵巻に見る挿花

仙溪

『慕帰絵詞』と『春日権現験記絵』で、鎌倉末から室町初期のおもに仏門での挿花の様子を見てきたが、もう少し時代を遡ってみよう。

出典：『続日本の絵巻８華厳宗祖師絵伝』中央公論社

老若の僧たちに金剛三昧経について講義する元暁（617～686）。後方の壇には青いガラスの瓶に花が挿してあり隣に香炉が置かれている。仏の崇高な教えに浸り、真理を深く悟るための道案内として、香を焚き花瓶に花を挿しているように感じられる。

出典：『続日本の絵巻８華厳宗祖師絵伝』中央公論社

新羅の学僧、義湘（625～702）は船で唐へ渡り、長安をめざす。ここには義湘が途中で立ち寄った長者の屋敷の様子が描かれている。深く仏教に帰依しているのだろう、机には経典が置かれている。侍女が花を挿した花瓶を持っているが、花瓶の口の形が花の形をしているところは、図③の花瓶と同じである。この絵の右には、長者の娘・善妙が、義湘に恋慕の思いを告げるところが描かれている。

絵巻では、恋心を深い信仰心に昇華させた善妙が、自ら海に身を投げて龍となり、新羅へ戻る義湘の船を守るというドラマチックな場面がつづく。

『華厳宗祖師絵伝』

鎌倉初期の建永元年（1206）に京都栂尾の地に高山寺を建てた明恵上人高弁（1173～1232）が華厳宗を広めたい一心で描いたとされる。朝鮮半島、新羅国の華厳宗の祖師である義湘と元暁の物語絵巻である。

ここにも異国のことではあるが、寺院における挿花の様子が窺える。

図①には青いガラス瓶に花が挿されており、その横に香炉も見える。場所は新羅。

図②の場面は中国（唐）のとある港町にある長者の屋敷。女主人の前に侍女が花を挿した花瓶を指し出す。机には盆石と香炉も置かれている。

図③は立派なお堂での講説に人々が集まる場面。お堂の正面に蓮の花と葉が挿された一対の花瓶と香炉が置かれ、女人が供花を捧げ持っている。場所は新羅の浮石山寺。

明恵上人自身は唐への留学を果たせなかったため、上人が実際に見てきたわけでは無いが、これだけの描写の元となる知識は持ち合わせていたと推察する。少なくとも明恵上人の時代の彼の地の描写と思って見ても良いだろう。

古代の中国や朝鮮において、挿花がどの様で

出典：『続日本の絵巻８華厳宗祖師絵伝』中央公論社

唐で学び、新羅に戻った義湘が、浮石山寺にとどまって華厳の教えを広めるため講説している場面。ハスの花と葉が幾本も挿された花瓶は白磁だろうか。他にも供えるための切り花を手に持つ女性が二人。一方は籠のようで、一方はガラスの鉢に見える。華厳経は４世紀頃インドでまとめられ、その後中国の杜順（557～641）が華厳宗を開いた。日本では義湘たちの後に唐で学んだ新羅の僧、審祥（生没不明）が736年に招かれて華厳経の講義をし、感動した聖武天皇は東大寺に大仏を造ることになる。今も東大寺は華厳宗を伝えている。そもそも華厳という名前には「花で荘厳された教え」という意味が込められている。

あったかを知ることは、いけばなが生まれる背景を想像する上での手がかりになるだろう。室町時代の「立て花」誕生の瞬間に思いを馳せるには、祈りの場における花について、そのルーツを知っておきたい。

『鳥獣人物戯画』

さて、明恵上人が建てた高山寺には『鳥獣人物戯画』も流転の末に伝わっている。蛙や兎が滑稽に描かれた絵巻だが、ここにも挿花の描写が見える（図④）。

『鳥獣人物戯画』は鳥羽僧正覚猷（１０５３～１１４０）ほか数名によって平安時代末期から鎌倉時代初期に描かれたとされている。

平安末期には、仏の前に蓮の花を挿した花瓶を供えることが仏事の決まり事であったことが想像できる。

６世紀に仏教が伝えられて後、多くの僧が仏の教えを学びに大陸を訪れ、様々な文化を持ち帰っている。それらは少しずつ根付き、又すこしずつ変化もしただろうが、元々の大陸での挿花がどんなものだったのか、もう少し探ってみたい。

④

出典：https://benrido.co.jp/wp-content/uploads/2014/07/nenbutu.gif

バショウの葉を光背に、釈迦如来のポーズでハスの葉にカエルが座る。前机の花瓶に３本のハスの花が立てられている。ガラス瓶だろうか。茎が透けているようにも見える。一つ気になるのは、前後の場面を見ても香炉が描かれていないこと。蓮の花の香りが代わりになるという心だろうか。又はこのような形式もあったのか。ひょっとして型にこだわり心を忘れることへの諷刺か。識者の解説をお願いしたい。

⑤

出典：『日本の絵巻６鳥獣人物戯画』中央公論社

カエルがハスの蕾をうやうやしく捧げ持つ。猿僧正への供物だろうか。ハスの茎には念珠が掛けられている。
仏教においてハスの花は特別な存在なのだ。

仏教遺跡に見る花と瓶

仙溪

インド→中国→日本という仏教伝来の流れの中で、花と器について探ってみよう。

インドのアジャンタ石窟寺院には6世紀頃の極彩色壁画が残る。日本に現存する最古の仏教絵画である法隆寺金堂壁画（奈良県斑鳩町・7世紀末）は、アジャンタの壁画を模したものとの説がある。（様式的には中国敦煌の莫高窟などにみられる初唐絵画の影響を受けている）

そもそもインドにおける祈りの場では、花は器に挿すのではなく、香りの良い花を摘んで糸で綴ったり、器に盛ったり散らしたりして供えられる。良い香りには悪を遠ざける力がある。図②でも菩薩の左後ろで蓮（もしくは睡蓮）の花を盛った盆を持つ人が描かれている。

泥の中から伸びて美しい花を咲かせる蓮や睡蓮は、仏教においては悟りの象徴とされている。図①の菩薩も、悟りを得た者の証として蓮（もしくは睡蓮）の花を手に持っている。

図③の菩薩は2種類の花を持っている。詳しくは不明だが、大きい方は白花の熱帯睡蓮か。小さい方は丸い白色5弁花で、同じく熱帯の水生植物ではないかと思う。様々な花に、悟りの開花を託していたのだろうか。

出典：https://www.ana.co.jp/travelandlife/feature/original/vol122/

出典：http://double-dolphin.blogspot.com/2015/12/photography-inside-ajanta-caves-tips-and-tricks.html

出典：http://kuradashieigakan.com/con34ajanta/ajanta3.htm

インド、アジャンタ石窟寺院は虎狩りに来ていたイギリス人によって1819年に発見された。紀元前1世紀～紀元後2世紀と、5世紀後半～6世紀に開窟された僧堂と祠堂（仏塔をまつる）からなる仏教窟。図①②は第1窟（6世紀頃）の蓮華手菩薩（図①）と金剛手菩薩（図②）。図③は第11窟の蓮華手菩薩。

インドで生まれた仏教は各地に広まって行く。

そもそもインドでは釈迦の入滅後、長い間仏像は造られなかったが、紀元後１００年前後に、北インドのマトゥラーとインド北西の王国ガンダーラで、最初の仏像が造られるようになった。

ギリシャ・ローマ美術の影響を受けていた中央アジアの民が、すでに仏教の栄えていたこの地域を治めたことで、仏教の内容が仏像として造形化されることとなったのだ。

図④はガンダーラから出土した2～3世紀の菩薩像で手に水瓶を持っている。菩薩とは更なる悟りを得るために修行している人をさすのだが、この像は未来で仏になることを約束された弥勒菩薩と考えられている。弥勒には慈しみという意味があるそうだ。優しいお顔である。

さて、水瓶は修行者の大切な持ち物であり、中の浄水や香水を清らかに保つために、花や木で瓶の口に栓をしたと聞いたことがある。

釈迦の弟子が水瓶と花を持つ姿で彫られた像も、中国の雲崗石窟に残っている（5世紀後半図⑤）。

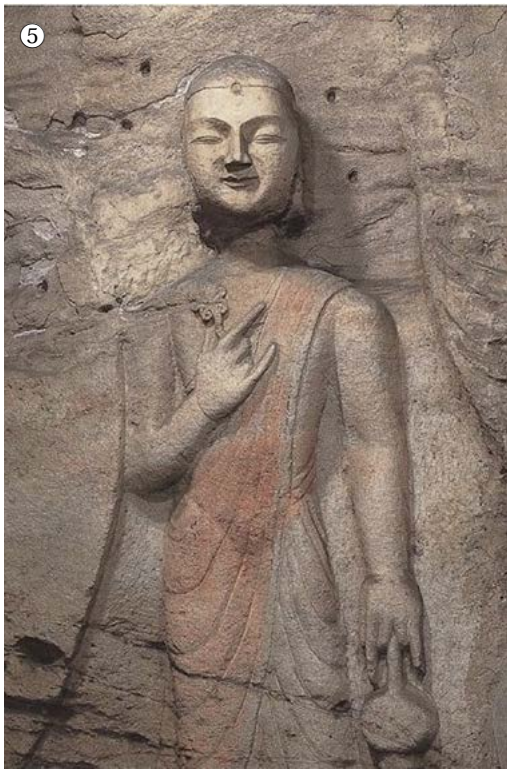
良い香りのする水と良い香りのする花を持って、釈迦の教えを広め歩く弟子達の姿が目に浮かぶ。水も花も修業に欠かせないものであり、また釈迦の教えによって人々の苦しみを和らげるための大切な役割があったのではないだろうか。

この水瓶もしくは花を持つ姿は、多くの菩薩像に見られるが、中には手に持った水瓶に花が挿された像も現れる。

インドでは花だけを摘んで供えていたものが、いつしか花瓶に花を挿して供えるようになったのには、気候と植生の違いも関係したと考えら

出典：http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/ 仏教美術 ?updated-max=2014-09-26T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=15&by-date=false

弥勒菩薩坐像　2～3世紀　ガンダーラ出土　松岡美術館蔵（仏教の来た道シルクロード探検の旅展図録より）



出典：http://arts.fgs.org.tw/fgs_arts/tw/pic_image_show.php?arg=FxFCWeoCwwZ5LqpsJgnd9EtatR38Zg

中国山西省大同市の西方にある雲崗石窟は5世紀後半の石窟寺院。第18窟の弟子像は左手に水瓶、右手に花を持つ（図④）。

れる。今もインドの女性はジャスミンの髪飾りを好んで身につけているが、花は摘むもので、花もそれに応える強さを持っている。中国や日本の花とは性質が異なる。

仏教はインドから中央アジアを経て敦煌へと伝わり、中国に広まることになる。敦煌は中国の西の玄関口。東西交易の要衝として栄えた砂漠のオアシスだ。

図⑥は敦煌・莫高窟の壁画である。左手に水瓶を持つ観音菩薩で、煌びやかな天蓋や瓔珞が目を引く。

消えて分からないが、右手には蓮華を持っていると想像したい。やがて悟りを求める心の象徴として、慈愛に満ちた導きの顕れとして、水瓶に蓮華が立てられて、日本の供花となり、いけばなへと繋がって行く。そんなことを空想している。

出典：http://avantdoublier.blogspot.com/search/label/ 敦煌 ?updated-max=2012-12-18T05:02:00%2B09:00&max-results=20&start=30&by-date=false

敦煌莫高窟 第４５窟 南壁中央壁画。盛唐・開元年間（７１３～７４１年）。水瓶を持つ観音菩薩。右手にも何か持っていたのかは消えていて分からないが、蓮華が持たれていたのではないだろうか。

仏教遺跡に見る花と瓶　②

仙溪

中国地域への最初の仏教伝来は1世紀頃だが、本格的に広まるのは4世紀以降で、5世紀の南北朝の時代には南北ともに多くの仏教寺院を建て、龍門や雲崗などの石窟寺院もつくられた。

6世紀に入ると内乱による廃仏廃寺の苦難の時を経た後、中国統一を果たした隋の文帝は新たに仏教で国を治めるべく中国全土に舎利塔を建てた。またこの時代に多くの宗派も誕生する。

そして7世紀、唐の時代。仏教が国による制限を受ける中、国禁を破って玄奘三蔵がインド（天竺）へ旅に出て多くの仏典を請来したことがその後の東アジア仏教の基盤となった。

日本には538年（552年説もある）に百済の聖明王から欽明天皇に仏像などが贈られたのが最初の仏教伝来とされている。

出典：http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

中国、洛陽の南方にある龍門石窟は南北朝時代の5世紀末から400年にわたって造営され、約10万体の仏像がある。北魏の孝明帝の時代に造られた皇甫公窟（527年完成）には、花瓶（？）に蓮の花と葉が立てられた浮彫が。器の下にも茎の足のようなものが見える。空中を漂っているようだ。

出典：http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

皇甫公窟は北朝・北魏の孝明帝（在位515～528）とその皇后のつくった一対洞窟。壁面には多数の仏龕をうがち、三尊仏、小仏、飛天、眷族（皇帝の一族）などが彫られて、全体で一つの物語を見ているようだ（図②）。図③は蓮の花を持って進む皇族たちか。

出典：https://kknews.cc/zh-cn/travel/rr9394n.html

その２００年後、華厳経（仏教経典の一つ）に感銘を受けた聖武天皇が、東大寺大仏開眼供養を果たす。

そもそも釈尊の悟りは一つでも、教えを請う相手に合わせて様々に発せられた言葉が、弟子達によって解釈され口承され、のちに多くの経典となった。そして各地に伝わる過程においても、それぞれの民族的な背景によって、微妙に受け止め方や表現の仕方は変化する。

中国においても、朝鮮、日本においても、仏教伝来は在野の信仰、思想、慣習とのせめぎ合いと融合があったと考えられる。

ネットで検索するうちに、ある画像に目が釘付けとなった。なんと花瓶に蓮が生けられたレリーフが6世紀初頭の中国石窟に！（図①）。

色々調べると、すでに古代インドで、命の源泉である水が貯えられた壺から蓮が生え出る「満瓶」と呼ばれる装飾文があり、宇宙の生成、豊穣多産を現すそうだ。

図①の器は「尊」に似ている。尊は古代中国で歴代の王が祖先の廟に酒を供えた祭器であることを思えば、蓮の咲く天界に先祖と共に再生し、一族の繁栄を願う気持ちが読み取れる。

この蓮を挿した（ように見える）図像は、法隆寺金堂天井等の装飾や（図⑤）、東大寺大仏開眼供養の花瓶（図⑥⑦）などに繋がっているようで、やがて日本のいけばなへと結びつく痕跡の一つを発見した思いでいる。

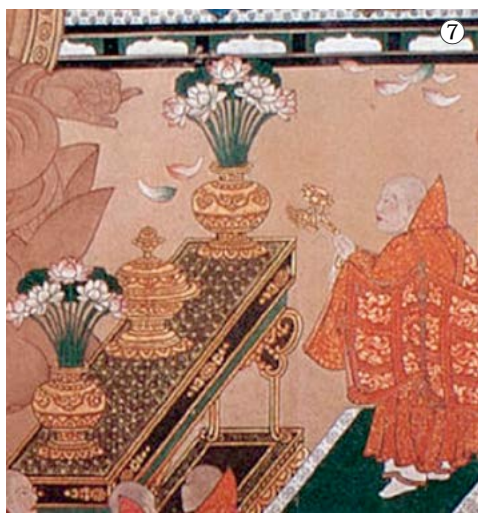
出典：http://art.ifeng.com/2017/0731/3363934.shtml

いろいろな開花の状態が彫り分けられている。中央の蓮の花には火焔宝珠のような中に小さな仏が乗っている。

出典：http://avantdoublier.blogspot.com/2014/09/blog-post_26.html

法隆寺金堂西の間天蓋内部の火炎宝珠を戴く蓮唐草文。国宝法隆寺金堂展図録より。

出典：https://www.wikiwand.com/ja/ 東大寺盧舎那仏像



出典：https://www.wikiwand.com/ja/ 東大寺盧舎那仏像

奈良の華厳宗大本山東大寺に伝わる「東大寺大仏縁起絵巻」（１５３６年）は3巻からなり、東大寺の創建、大仏の鋳造、開眼供養や鎌倉時代の再建の様子などが描かれている。開眼供養の場面には蓮の花と葉（の造花）が挿された一対の金銅の花瓶を見ることができる。７５２年４月９日の様子だが、太陽暦でいうと5月26日で、ハスの開花には一月早い。

古代インドの蓮のイメージ

仙溪

ハス（蓮）は「泥より出でて泥に染まらず」と言われるように、ハスは清浄と不浄が混在する中における悟りの象徴という清らかなイメージがあるが、そもそも仏教が伝わってゆく過程で、ハスがどのような意味を持ったのかを探ってみよう。

まずはインドの古代遺跡にハスが登場する。釈迦の死を「涅槃」というが、涅槃とはあらゆる煩悩が消滅し、苦しみを離れた安らぎの境地、悟りの世界のことをさす。インドにおいては涅槃の象徴として、釈迦の遺骨（舎利）を祀るストゥーパ（舎利塔）を建て、信仰の拠り所とした。

ストゥーパは丸い鉢を伏せた形をしていて、そこに納められた舎利は「種子」、それを覆う覆鉢は「子宮」や「卵」と同一視され、万物が生ずる宇宙の始原的な意味合いを持つ。

ストゥーパの周囲は石の門や玉垣で囲われ、それらに釈迦にまつわる物語が彫られている。また力強い生命力を表現した様々な装飾も彫られているのだが、煩悩の無い生命の輝きそのものとして、ハスの模様が多く見られる。

ハスは水から生まれ次々に花を咲かせ、その地下茎は水面下で網のように伸び広がる。根茎を二股に枝分かれさせながら節々から葉や花を生じるハスの生命力に、古代インド人は魅了された。

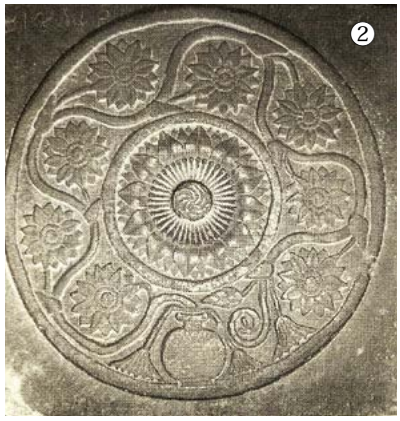
図①の浮彫は蕾、開花、実、葉が生き生きと表現されて、まるで蓮一色のいけばなのようだ。しかしこの丸い壺は生命が生まれる根源としての「水」の表現であって花器ではない。壺に満たされた水からハスが生え出る様子を表している。古代インドで大層好まれた誕生と生成の模様で「満瓶（プールナ・ガタ）」と呼ばれている。

また、ハスの茎を波状に表して、節々から枝分かれしながら花、葉、水鳥などで埋め尽くす「蓮華蔓草」は、生成と増殖を象徴する重要な装飾文である。（図②③）

インドにおける誕生、生成、増殖の象徴としてのハスは、やがて中央アジアや中国では別の意味を持つことになる。

出典：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭（吉川弘文館）

壺に満たされた生命の根源としての「水」からハスが生え出る様子。誕生と生成の模様で「満瓶（プールナ・ガタ）」と呼ばれている。バールフト遺跡（インド中部）。



出典：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭（吉川弘文館）

丸い壺から出る蓮華蔓草が、中央の開花した蓮華を一周している。ハスの花は太陽の花であり、生命の花であり、増殖の花である。バールフト遺跡（カルカッタ・インド博物館）。

出典：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭（吉川弘文館）

マカラ（インド神話に登場する怪魚）の口から発出する蓮華蔓草。サーンチー遺跡、第一塔東門。

参考図書：『仏教美術のイコノロジー』宮治昭著（吉川弘文館）

古代インドの聖樹信仰

仙溪

仏教がインドからガンダーラ、中央アジア（敦煌）を経て中国へ伝わり、その後日本に来るまでに、ハス（蓮）に対するイメージがどのように変化してきたのかを知りたいと思った。

そうすれば仏前供花のルーツに辿り着き、花瓶に花を挿す行為のはじまりの一つを見つけられるかもしれない。

そもそもインドでは植物に対してどんな思いがあったのだろう。

仏教が生まれた古代インドでは、まず樹木に対して特別な思いがあったようだ。

いったん葉を落として死んでも再び葉をつけて生き返るところに、神秘的な生命力、尽きることのない創造力を感じ取っていた。

そして繁殖力の旺盛な特定の樹木が聖樹として崇拝された。

写真①は生命の樹「如意樹」を表す柱頭彫刻で、中インドのベースナガルで発見された紀元前2世紀頃のもの。バンヤン樹（ベンガルボダイジュ）の枝から財布や果実、蓮などが垂れ下がる。願いのものを与えてくれる樹だ。

古代インドではもともと聖樹に対する民間信仰があり、人々が行っていた供養の仕方「焼香」「燃燈」「散華」「伎楽」などが、そのまま仏教においても引き継がれている。

さらに詳しく云えば、香・華・塗香・燃燈・幢幡・傘蓋・五指印（掌印）・音楽・右繞（右周り）などの供養法は、聖樹（の祠）に対して行っていたものが、舎利を納めた仏塔（ストゥーパ）に対しても同様に行われるようになった。

初期の仏教美術において釈迦の伝記を彫る時に、釈迦は釈迦の居場所である樹木で表現されていた（写真②）。釈迦の生涯と関係の深い聖樹で釈迦の存在を表すことで、誕生、成長、増殖、死滅、再生という生命の循環をつかさどる宇宙の真理を悟った釈迦と聖樹を重ねたのだろう。

仏教の根底に古代から続くインドの聖樹信仰があることは、今日の私達のいけばなとも深いところで繋がっている気がする。

聖樹の元では人も動物も植物も平等にその恵みを授かる。人は生きとし生けるものと共にあり、その長としての樹木を畏怖し尊ぶ心は、私達が花をいけるときにも持っていたい思う。

いつか、どこかで、古代インドの聖樹信仰に影響を受けて、植物に対する尊厳の心から、水の入った器に花を挿した僧侶がいたのかもしれない。

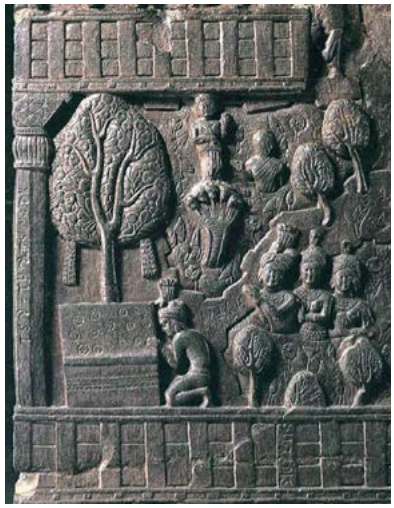
インド人の植物に対する思いに学ぶのも、今の私達にとって、大切なことではないかと思う。

①

カルカッタ・インド博物館入口の如意樹

出典：http://kosoken.blogspot.com/2015/01/blog-post_20.html

②



エーラパトラ竜王の礼拝
紀元前１世紀初　バールフット出土
インド博物館蔵
聖樹と台座で釈迦（ブッダ）を表している。

出典：https://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_291-301_Tadashi-TANABE.pdf

仏陀ゆかりの三聖樹

仙溪

インドの聖樹（聖木）にはどのような木があるのだろう。仏教とゆかりのある木について見てみよう。

お釈迦様の生涯と深く関わりのある木は次の3つ。

菩提樹　インドボダイジュ
沙羅双樹　サラノキ
無憂樹　ムユウジュ

釈迦は長い遍歴と苦行の末に、ウルヴェーラ村（今のブッダガヤ）で一本のインドボダイジュの下に座し、49日間瞑想して真の悟り「菩提」を得た。

太古よりインドボダイジュは大切な樹木であったようだ。インダス文明の遺跡から、その葉が描かれた陶器が見つかっている。葉、樹皮、根に様々な薬効があり、ヒンズーの主要な三神が棲む木でもある。

インドの国樹になっているくらい大切な木なのだ。

クワ科イチヂク属の高木で、花は見ることができず、枝に直接小さな実ができる。ハート型の葉が風にパタパタと揺れる音がなんとも心地よいそうだが、釈迦もそんな音を聞きながら瞑想していたのだろう。

中国、日本でこの木は育たない。代わりにシナノキ科のボダイジュが寺院に植えられている。こちらは中国原産の落葉高木で、日本には栄西禅師が宋から種子を持ち帰った。

釈迦は45年の間、数百キロの道を何度も行き来して説法を続け、80歳で亡くなる。終焉の地、クシナガラの川辺にある2本のサラノキの下で

インドボダイジュ

学名：Ficus religiosa
英名：bodhi tree　pippala tree
クワ科・イチジク属の高木。樹皮や根皮などを薬用とする。

信仰を集める樹齢140年のインドボダイジュ。ブッダガヤのマハボディ寺院。
出典：https://tricycle.org/magazine/bodhi-tree-tlc/

出典：https://china.desertcart.com/products/139063302-pmw-peepal-tree-fruit-powder-sacred-fig-raavi-100-gloose-packed-loose-pa

出典：https://astrotalk.com/astrology-blog/why-is-peepal-tree-worshipped/

サーンチー遺跡のレリーフ。紀元前3世紀にアショーカ王がブッダガヤに建てた寺院とボダイジュ。西暦1世紀。
出典：https://www.wikiwand.com/en/Bodhi_Tree

儀式で使用された陶器のハート型の葉模様。 B.C.2600–2450。
出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/ インダス文明 #/media/ファイル :Ceremonial_Vessel_LACMA_AC1997.93.1.jpg

釈迦が息を引き取ると、サラノキは時ならぬ花を満開に咲かせ、釈迦の体の上にその花を降り注いだという。

サラノキはフタバガキ科の高木で、材は堅くて耐久性があり、様々に利用されている。落ち葉は草の茎で綴り合わせて丸い葉皿として使われる。

幹から採れる樹脂（ドゥーナー）は様々に利用され、燃やして出る良い匂いの煙は病原菌を殺して辺りを浄化するといわれている。そして春に咲く花にも芳香がある。釈迦がこの木の下を選んだのもなんとなくわかる気がする。

涅槃。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ遺跡。２～３世紀。インド博物館（カルカッタ）。
出典：https://www.pinterest.jp/pin/389772542744921786/?nic_v2=1a2bOOxfl

㊤と㊦㊧ 出典：https://www.yamakei-online.com/yama-ya/detail.php?id=677

サラノキ

学名：Shorea robusta
英名：Sal tree
フタバガキ科・サラノキ属の高木。３月頃、葉の生え替わりと共に、淡いクリーム色の小さな５弁花が無数に咲く。花には芳香がある。

出典：http://www.flowersofindia.net/catalog/slides/Sal.html

日本ではツバキ科のナツツバキやヒメシャラが沙羅双樹として植えられている。

ムユウジュはインドでアショーカと呼ばれるが、「ア（無い）」「ショーカ（悲しみ）」から無憂樹の字が当てられた。釈迦の母マーヤーがルンビニーの園でこの木をつかもうとしたときに、右脇から男の子（のちの釈迦）が生まれたとされる。

伝承によると誕生してすぐに七歩あゆみ、自ら偉大なることを獅子吼（ししく）し、温冷二水によって身を清められた（灌水）とあり、その様子はのちに石に彫られ、仏伝のワンシーンとして今に伝わる。

ムユウジュはマメ科の常緑小高木で、春の暖かさを象徴するような黄色から赤色の花を咲かせる。釈迦が世に現れる場所にふさわしい、優しい葉と温かな花色を備えている。

出典：https://explorepharma.files.wordpress.com/2010/10/ashoka.jpg

釈迦誕生。ガンダーラ、ロリヤン・タンガイ出土。２～３世紀。インド博物館。
出典：https://www.pinterest.cl/pin/AX08l5eKMSm7yu8uWT-JzMV1xyS8-Mt049tKRfOXxzzWLUXoRwCOLJs/?nic_v2=1a2bOOxfl

出典：http://medicinplants.blogspot.com/2008/08/ashoka-tree-sorrowless-tree.html

ムユウジュ

学名：Saraca asoca
英名：Asoka tree,　Sorrowless tree
マメ科・ムユウジュ属。細長い葉の常緑小高木。３月頃に美しいオレンジ色の花（萼）が咲く。

大乗仏教＝自己救済を主眼とする原始仏教に対し、広く衆生を救済しようとする新しい仏教思想。クシャーナ朝時代にインド北西部で生まれ、中国、朝鮮、日本に広がった。

壁画に描かれたハスと瓶

仙溪

仏教誕生以前より、古代インドではハスを生命そのものの象徴としてとらえていたことや、強い生命力を持つ聖樹に対する信仰心があったことを、前号まで見て来た。

では、古代インドでのハスに対するイメージは、仏教が伝わる中でどのように変わっていったのだろう。

ヒンズー教の神話でも、ビシュヌ神の臍から生じた蓮華の上にブラフマーがすわって宇宙を創造した話があるが、水から生まれるハスに、無から出現する世界、宇宙を重ねていたことがうかがえる。

何かがハスから生まれるというイメージは仏教の経典にも様々な形で引き継がれ、また新たなイメージも加わって行くこととなるのだが、詳しいことは一旦置いておき、まず中国の西の玄関口、敦煌ほかの壁画から、いけばなの観点で見て絵の中のハスの気になるものをいくつか紹介してみよう。

大乗仏教において出家者の大切な持ち物の一つに水瓶がある。菩薩がよく手に持っているのも水瓶で、修行中である菩薩が持っているのは頷ける。図①は菩薩が右手に持った水瓶に花が挿されているように見えるが、水瓶は浄水や香水を入れる容器なので、悪い物が入るのを防ぐために花で口に蓋をすることもあったようだ（図②）。はたして図①の花も蓋として描かれているのだろうか。

また、花を挿したように見えるガラスの器を持つ菩薩の絵（図③④）もあるが、古代インドでは生命の源としての水を壺で表現し、そこからハスが生まれ出る図像（満瓶と呼ばれる）もあったので、循環する生命そのものを表現しているのかもしれない。このガラスの器と花にどんな意味があるのだろう。

①

大勢至菩薩立像（絹本設色）。敦煌莫高窟。（唐代）。
ペルシャ製の銀製壺のような瓶にハスが挿されている。
出展：https://kknews.cc/culture/5bp4e8l.html

②

唐の太宗・李世民の五女、李麗質（621 ～ 643）の墓の壁画に、ハスの花を挿した瓶を持つ侍女が描かれている。西安の北西に位置する昭陵にある。
出展：https://kknews.cc/zh-my/history/5o23jn8.html

③

ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟 328 窟壁画。
盛唐（713 ～ 765 年）。
出展：https://spc.jst.go.jp/experiences/change/change_1719.html

④

ガラス碗を手に蓮を養う菩薩。敦煌莫高窟 199 窟壁画。中唐（766 ～ 835 年）。
出展：https://kknews.cc/culture/5bp4e8l.html

張世卿墓の壁画
前室4面の壁画（図①～④）

中国「遼」の壁画墓

仙溪

遺跡の壁画を調べていたら、花瓶に花を挿した絵がいっぱい出てきて驚いた。日本の平安末期にあたる西暦一一一六年に造られた、中国宣化地方の豪族の墓である。

中国では唐が滅び、五代十国の時代を経て宋の時代へ。唐時代の国際色豊かな王朝文化から、宋時代の自由な庶民文化へと変わってきた頃である。

その辺りは遼（内モンゴルを中心に中国の北方を支配した国）の統治下にあり、農耕地でありながら遊牧民の影響を色濃く受けた地域だ。そんな土地の漢民族の豪族、張世卿という人の墓である。

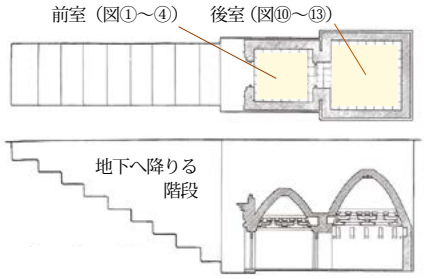
張世卿の墓は地下に穴を掘って造られている。階段を降りて行くとまず前室があり、その奥に棺が置かれる後室がある。すべて煉瓦で造られ、白い漆喰が塗られている。そして色鮮やかな壁画が描かれている。

墓誌によると張家は代々農業に従事し、地主として土地を賃貸しながら果物を栽培し家財を蓄え、天災の年でさえ粟を献上し、民衆に与えたため官位を拝領したとある。

そんな中でも張世卿は自らよく働き、当時の道教に憧れ、儒学を崇め、仏教を敬い、多くの人から慕われる人物であったようだ。

彼は仏への供花のために珍しい花を育て、特別に花瓶まで造らせた。その花の種類は百を超え4万本に至り、五百個の瑠璃瓶（ガラス花瓶）

⑤ 墓の平面図と側面図



出展：①～⑬
https://artouch.com/views/content-280.html

後室4面の壁画（図⑩～⑬）

を作ったと記されている。張世卿という人が供花に対して拘りを持っていたこと、そして当時の供花に瓶花がすでに加わっていたこと、さらに園芸栽培のブームがおこっていたことが推測できる。

後室、天井中央の蓮華模様の周りには星座図と散華が描かれ（図⑥）、梁の下に蓮華台座と蓮の葉にはさまれた長方形の凹みがあり、その間に瓶花が供花として描かれている（図⑦⑧⑩～⑬）。その数18。生前に彼が行った供花の功徳を表したものだろうか。そうすると凹みにはそれぞれ仏像があったのかもしれない。

青い花瓶にハスの花と葉が見える（図⑦）。他の木や花は何だろう。

描かれている情景が興味深い。朝、扉の外から侍従が入ってきて読経の用意を始める（図⑩）。机には経箱と経典、茶、香が用意され、そして今まさに瓶花を供えようとする男性の姿が（図⑨⑩）。さらにお茶を準備する場面（図⑫）、夜にお酒を用意する場面が続く（図⑬）。

なんて和やかな雰囲気なのだろう。こんなお墓があったとは。

九百年前、熱心に花をいけて精進を重ねた張世卿という人がいたことを、壁画は私達に教えてくれている。

参考：学習院学術成果リポジトリ
論文「宣化地方遼時代張世卿壁画墓に描かれた器物」李含

上座部仏教＝南伝仏教、テーラヴァーダ（長老の教え）仏教。釈迦の戒律を厳格に守る保守的な仏教。スリランカ、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオスに伝わる。

スリランカのガードストーン

仙溪

古代インド人は宇宙の生成や豊穣多産を、壺から蓮が生え出る図像に託していた（写真①）。その命の源としての壺のイメージは、その後どのように展開してゆくことになったのか。

インドの南東にある緑豊かな島国、スリランカには紀元前3世紀に仏教が伝えられ、現在も人口の約7割が仏教徒である（上座部仏教）。

スリランカ北部の都市アヌラダプラにあるアバヤギリ大塔（写真②）は、紀元前1世紀建立の仏塔で、5世紀初めには5千人の僧がいたことが中国仏教僧法顕の『仏国記』に無畏山寺の名で記されている。当時は大乗仏教の研究もする仏教世界の中心的研究機関であった。

仏塔（ツトゥーパ）に至る道の両側には、石で造られた壺が置かれ（写真③④）、壺から様々な動植物が生まれ出る石の浮彫が参拝者を出迎える（写真⑤）。

「壺」は水の象徴であり、水は生命の源と考えると、生命世界の母胎をイメージして造られた仏塔の入口に相応しい。

古代スリランカの仏教寺院遺跡には特有の装飾として、ムーンストーン（サンダカダパハナ）とガードストーン（ムラガラ）がある（写真⑥⑦⑧）。寺院に入るにはこの半円形のムーンストーンの上を裸足で通ることになる。神聖な領域に入るための禊ぎの役目があるのだろう。そのムーンストーンの両側にあるのがガードストーンだ。

全身を宝飾で着飾った男性が片手に発芽する枝を持ち、もう一方の手には壺を乗せている。この像は蛇神王ナーガラージャで、頭の後ろに頭が7つあるコブラが見える。（写真⑧）

蛇神ナーガは地底世界を統治し水や雨とも関係が深い。仏教でも釈迦が瞑想している間、ムチャリンダというナーガラージャが嵐から釈迦を守ったという。

そんなナーガラージャが水を象徴する壺を持ち生命を活気づかせ、豊穣と繁栄を約束しつつ聖域を守護してくれている、そんなイメージが湧いてくる。

この生命が生まれ出る壺はプルナガタ、又はプルナカラサと呼ばれ「満瓶」と訳されているが、プルナ（満たされた、豊穣、無限）のガタ（もしくはカラサ＝壺）なので「豊穣の壺」「繁栄の壺」と呼んでもいいだろう。スリランカではプンカラサと呼ばれ、現在も幸運と豊かさのシンボルとされている。

古代インドで生まれた「満瓶」のイメージは、微妙に変化しつつそれぞれの仏教国に引き継がれて行った。

壺がもつ生命世界の母胎としての観念を、一華道家として見直してみたい。

①

プルナガタ（満瓶）のレリーフ。南インドアマラバティ仏教遺跡。紀元前２世紀頃。

出展：https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_gallery_parent/page:3?id=491&siteid=160&minrange=0&maxrange=0&count=24

②

アヌラダプラのアバヤギリ・ダーガバ（大塔）。紀元前１世紀。この高さ 75m の大塔は、かつて高さ 110m のドームで覆われていたそうだ。

③

④

⑤

参道には石の壺や壺から動植物が生まれ出るレリーフが見られる。

出展：②～⑤ https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g304132-d3600154-Reviews-or15-Abhayagiri_Dagaba-Anuradhapura_North_Central_Province.html#photos;aggregationId=101&albumid=101&filter=7

⑦

⑥

スリランカ北中部の古都、ポロンナルワの仏教遺跡群の 1 つで「ワタダーゲ」と呼ばれる仏塔跡。元々はドーム状の屋根に覆われており、中央の仏塔を 4 体の座像仏が囲む。四方に門があり、それぞれの階段下に半円形のムーンストーン（サンダカダパハナ）と一対のガードストーン（ムラガラ）が置かれている。12 世紀頃の造立とされる。密林に埋もれていたのを 19 世紀に発見された。
半円形のムーンストーンには蓮華の周りに唐草、馬、象、鳥などが彫られている。スリランカ北部は南インドから何度も侵略を受けた歴史があり、古い時代にはあった牛がこのムーンストーンにいないのは、侵略者がヒンズー教徒だったためと推測されている。

出展：⑥⑧ https://en.wikipedia.org/wiki/Muragala　⑦ https://lonewolf17.com/polonnaruwa-quadrangle-vatadage

⑨

蓮が生え出る壺（プルナガタ）のみが彫られたガードストーンも見つかっている。

⑩

バーマナと呼ばれる像。建物を支える姿をよく目にする。様々な解釈があるが、その 1 つに財宝の神クベーラの手下であるヤクシャ（夜叉）の 1 人で、もとは鬼神だが富を守る役目を持つとされる。
一方、古代よりインドにおいて、ヤクシャは聖樹に住む精霊で、人々に畏れられる存在である反面、無尽蔵の生命力を有する豊穣多産をつかさどる神でもあり、安全・安泰・繁栄の守護神と考えられている。

出展：⑨⑩ https://thuppahis.com/2017/12/08/the-guard-stones-of-ancient-sri-lanka/

⑧

ワタダーゲのガードストーン。聖域の守護神と推測される。コブラフードをつけたナーガラージャ（蛇神王）が片手に萌芽する枝を握り、片手に繁栄の壺を持つ。壺からは蓮の花と葉が生え出ている。足元の小人も守護神としてのヤクシャと思われる。

古代インドの壺とハス

仙溪

インドの女神ラクシュミーはハスから生まれたとされる。図①では壺から出たハスの上に立つ姿で表されているが、仏像の蓮華台座を思い浮かばせる。

前回、スリランカのガードストーンやムーンストーンを紹介したが、そのあとで南インドの仏塔（ストゥーパ）にその原型を見つけた（図⑥⑦）。

図⑥や図⑨の石板には仏塔が浮彫されている。図⑧は生命を生み出す豊穣の壺「満瓶」だが、図⑨の仏塔とどことなく似ていないだろうか。仏塔の上部が丸い壺に見えてくる。

釈迦は生前に仏塔の造り方を指示しているが（※）、それによると覆鉢を塔身の上に置き、平頭を乗せ、傘を立てて相輪を重ねた上に宝瓶を置くこととしている。仏塔自体を大きな壺とするなら、先端の壺（宝瓶）と、舎利（遺骨）容器も含めると、壺を何重にも積み重ねている事になる。まるで宇宙の象徴として壺をとらえていたかのようだ。

図⑩の太陽に見える大きなハスの開花模様は、あらゆる生命の原動力としての太陽をハスの花で表現したものだろう。図④⑤のハスやスイレンの図像で、その場を生き生きと活気づかせたかったのだと思う。

壺とハスは共に生命の不思議な力そのものであり、命が湧き出る源なのだ。

日頃いけばなが空間を生き生きと活気づかせることに不思議な思いを持っていたが、古代インド人は壺や花の持つ力をすでに強く感じ取っていたのだ。

（※）根本説一切有部毘奈耶雑事・巻第十八に書かれている。

バールフット

①

①壺から出たハスの花に立つラクシュミー像。２頭の象が女神の左右から水（ガンジスの聖水）を注ぎ祝福をする灌頂の構図。「ガジャ・ラクシュミー」と呼ばれている。中央インドのバールフット出土。紀元前２世紀。インド国立博物館。

出展：① https://ja.m.wikipedia.org/wiki/ ファイル :Gajalaxmi_-_Medallion_-_2nd_Century_BCE_-_Red_Sand_Stone_-_Bharhut_Stupa_Railing_Pillar_-_Madhya_Pradesh_-_Indian_Museum_-_Kolkata_2012-11-16_1837_Cropped.JPG

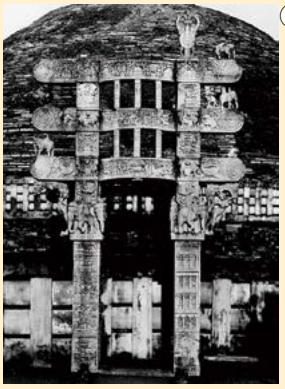
サーンチー

②

釈迦の遺骨は初め８つの仏塔（ストゥーパ）に分けられていたが、紀元前３世紀にアショーカ王が７つの仏塔の遺骨を取り出して８万４千の仏塔を建てて安置したという。中央インドのサーンチーに建てられた８つのうち３つが残っている。

②仏塔の１つ。塔門や玉垣（欄楯）は紀元前後に増やされた。

出展：②③④⑤ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049


③

④

⑤

③塔門には仏伝図や本生図のレリーフが。④壺からハスが生え出る図像「満瓶」。⑤熱帯スイレン（？）が亀の口から生え出ている。

アマラーヴァティー

⑦

⑥

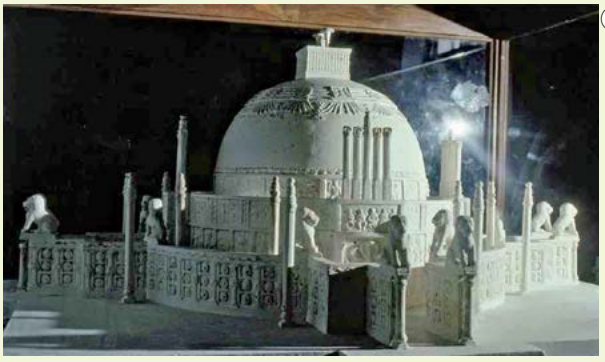
インド南部、クリシュナ川流域にあるアマラーヴァティーでは紀元前３世紀から紀元３世紀の建造物が発掘されている。大乗仏教を体系化したとされるナーガールジュナ(龍樹)ゆかりの地である。⑥アマラーヴァティー仏塔の装飾石板。仏塔がどのように造られたかが分かる。下中央にムーンストーン、その左右に壺がある　⑦別の石板にも満瓶（プルナ・カラサ）が確認できる。仏塔内部で宝輪のある玉座を崇拝している。

出展：⑥⑦⑧⑨⑩⑪ https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati　マドラス博物館所蔵

⑨

⑧

⑧仏塔の柱断片の満瓶。ハスとスイレンが生え出た上にライオンと釈迦を象徴する玉座が積み重なる。　⑨釈迦入滅後建てられた８仏塔の１つラーマグラーマ仏塔（ネパール南部）の浮彫。蛇神ナーガが守護していたため、アショーカ王はここだけ舎利の取り出しを諦めた。


⑪

⑩

⑩玉垣の彫刻。日の出のようなハスの開花模様が彫られている。その下に怪魚マカラの口から植物が生まれ出る様子も。
⑪仏塔の模型。四方に門があり、どの方向から見ても図⑥の石板のように見える造りになっている。

エジプトの青いスイレン

仙溪

仏教の経典に出てくる青蓮華はハスではなく青い熱帯スイレンだ（図①）。古代インドの遺跡にはハスと共にスイレンも浮彫されていた（前号参照）。この青いスイレンにはどんな背景があるのだろう。

①熱帯睡蓮（エジプトロータス）

出展：「花の王国１園芸植物」荒俣宏著／平凡社

青いスイレンと言えば古代エジプトだ。毎年ナイル川が氾濫することで生まれる肥沃な大地が、豊かな文明を育み、人々は自然界に様々な神の力を感じ取った。

朝に咲き夜に閉じる青スイレンや夜に咲き朝閉じる白スイレンは、死と来世での再生を連想させた。スイレンは神々と結びつき神聖な花となった（図⑤）。

ツタンカーメンの棺に残された花襟（図⑥）には様々な植物が織り込まれていてスイレンも加えられている。スイレンから生まれる像までも（図⑬）。それらは蘇りの祈りの現れだろう。

饗宴の図。青いスイレンの香りを嗅ぐ女性。

スイレンのブーケを持つ女性。

沼地での狩猟の様子。左にパピルス（猫も）、足元にスイレンが見える。

出展：②③④書記官ネブアメンの墓壁画、B.C.1350。⑪予言者ユーザーハットの墓壁画、B.C.1294-1279。（メトロポリタン美術館の複製画）https://www.flickr.com/photos/menesje/sets/72157608008967297/with/4058204742/

⑤冥界の神・オシリスの足元から出る白スイレン。パピルスに描かれた「死者の書」（フネフェルのパピルス）の一部。B.C.1275。（大英博物館）

出展：⑤ https://www.britishmuseum.org/collection/object/Y_EA9901-3

熱帯スイレンには良い香りのするものが多い。彼らはスイレンを池や沼で栽培し、花から香料を抽出した。青スイレンの香りには鎮静作用があるらしい。花の香りを直接嗅いだり、葬儀の花束（図③）や神殿の捧げもの（図⑪）、女性の花飾り（図⑩）などとして利用した。

人々が集まる部屋にスイレンを生けることもあったのではないだろうか。神秘的な甘い香りが広がるように。

色々調べてみて、エジプトとインドの関連性を感じている。スイレンやハスと神々との関係。再生を願う花襟（図⑥）とインドのハスの開花図像（前号11頁・図⑩）の類似性。香りの良い花を供えることや、良い香りを体に塗ることも共通している。

エジプトのスイレン信仰に、生命の根源としての「壺」がインドで加わり、仏教と共に日本へ来ていけばなへと昇華した。そんな大きな流れを想像している。

ツタンカーメンの棺の花襟。メトロポリタン美術館。出展：https://www.metmuseum.org/art/collection/search/684769

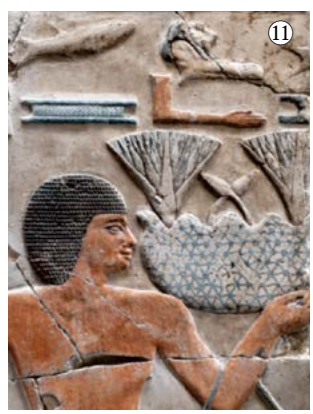
テーベのレクミラの墓壁画、B.C.1479-1425。クレタ島から来たミノス人使節団。様々な金属器の贈り物を持っている。

出展：⑦ https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157678333466360/with/32544493391/

ファイアンス・ボウル。B.C.1550-1458。四角い池の周りにスイレンが描かれている。エジプト・ファイアンスは古代エジプトの鮮やかな青緑色の焼き物。

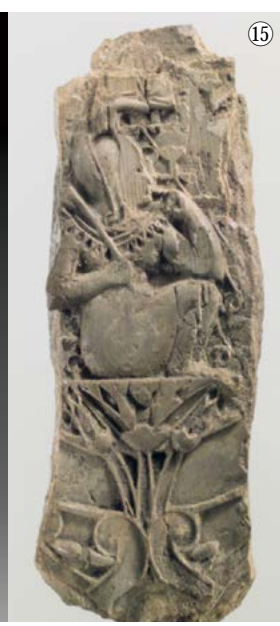
葦の束形のアラバスター。スイレンを挿すため？ B.C.15th。高さ 6.5cm。

⑦の部分複製画。スイレンの造花が立てられた器。出展：https://www.metmuseum.org/art/collection/search/544609



センウセレト 1 世のピラミッドより。供物室のスイレンの鉢。B.C.1961-1917。

スイレンの頭飾り。



⑮スイレンから生まれる太陽神の子。象牙。B.C.8th。
⑯スイレンの神、ネフェルトム。銅。B.C.332-30。

スイレンから出現するツタンカーメン

スイレンの造花。木製。高さ 8cm。B.C.2051-1981。

出展：⑨⑪⑫⑭⑮⑯　https://www.metmuseum.org/art/collection/　（メトロポリタン美術館の公開データベース）
⑬ https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157666023968570/page3

深山の空気

仙溪

久しぶりに深山の空気を吸ってきた。30年ぶりの大台ヶ原。晴天のもと、山道を標高１６９５ｍの日出がケ岳をめざす。といっても駐車場からの標高差は１２０ｍほど。気持ちのいい山歩き。

辺り一面ミヤコザサの中を歩く。このササが地面を覆ってしまうと、他の樹木の発芽ができなくなってしまうのだが、昔、台風による倒木を搬出したことがきっかけで、林床が乾燥し、コケ類が大幅に減少してササの天下となってしまったそうだ。更にササを求めて鹿が増え、樹皮が食べられて森の消失が加速する。

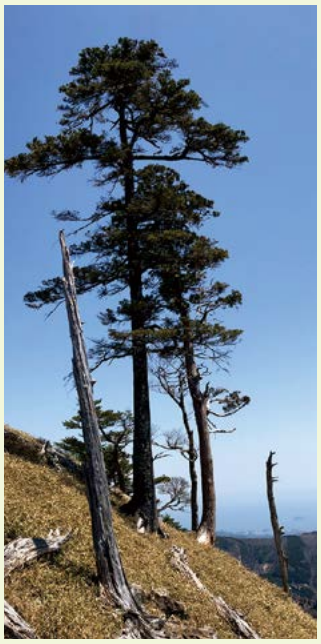
それでもツツジの仲間は頑張っていた。シロヤシオ、アケボノツツジ、ツクシシャクナゲ、サラサドウダン、コアブラツツジ、トサノミツバツツジ、ヒカゲツツジ、等々。花が咲いたらさぞ素晴らしい景色が見られるに違いないが、４月下旬なのに山はまだ晩冬の様相。花の季節に是非また来たい。

過酷な山道を車で走って大峰山の修験者が泊まるという洞川温泉で１泊。湧水ゴロゴロ水をいただいて、龍泉寺、天河大弁財天に参詣し、家族の健康と花技上達を祈願して帰路についた。

大台ヶ原の絶景ポイント、大蛇嵩（だいじゃぐら）。深い谷底の向こうに山並みが迫る、神聖な空気を感じる場所だ。このあたりにはコウヤマキ、ゴヨウマツ、ツクシシャクナゲが見られる。（奈良県吉野郡）

ミヤコザサに覆われた山肌に立ち枯れた木や倒木が白く残る。屋久島にならぶほどの多雨地帯なのに、森が消えていた。正木峠付近。

途中、ツツジのトンネルを抜けていく。またいつか、花の季節に訪れたい。（4 月 21 日撮影）



1963 年撮影の正木峠。（説明板より）昔は苔むす森だった。現在、森林再生の試みがはじめられている。

丹生都比売神社
花盛祭（はなもりさい）　仙溪

ぶらりと一人旅。

花盛祭という名前に惹かれて、高野山の入口にある丹生都比売神社を参拝してきた。（JR笠田駅からバスで30分）

弘法大師空海が高野山に金剛峯寺を建立するにあたって、丹生都比売神社が神領を寄進したと伝えられ、高野山と深い関係にある神社である。

花盛祭はご祭神に花を供え春の訪れを寿ぐ祭りで、季節の花が参道を飾り、神前への供物にも花が添えられる。祝詞と奏上、子供達による神楽舞、参拝者の玉串奉奠がおごそかに行われた。

この地は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一つとして世界遺産に登録されている。その理由の一つに「神仏習合」がある。お山への信仰心と仏教とが融和した場所。水の神、山の神に感謝し、花を供える。仏前の供花も同じ心で行われていたのだろう。今も昔も、花が人の気持ちの橋渡しをしてくれている。

清々しい青竹に季節の花が。高野山で空海が催した万華会と関係があるのかも。

㊧花を浮かべた石の花瓶。拝殿両脇にあり、古代インドの満瓶を思わせる。

子供神楽の奉納。平安を願う浦安の舞だ。雅楽に鈴の音が重なる。桜の挿頭（かざし）に春を感じる。

樹齢600年以上、近畿最大の巨樹「十五社の楠」。笠田駅から徒歩5分。かつて十五社明神が鎮座する妙楽寺の境内だったが、今は楠の下に小さなお堂が一つ。

和歌山県伊都郡かつらぎ町のJR笠田駅で下車。柿、梅、桃、梨、りんご、ぶどう、みかん等の畑が点在する。

生命を生み出す豊穣の壺
プルナ・カラサ

仙溪

花と器の図像を時代を遡って探すうち、古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いた。それはどうやら宇宙、生命の母胎のイメージが込められた、エネルギーに満ちあふれるもののようである。

仏教が起こり、釈迦の教えを伝え継ぐために遺骨を納めた仏塔（ストゥーパ）が各地につくられたが、仏塔は釈迦の墓としてだけではなく、迷いの世界を抜け出した悟りの境地そのものであり、万物が生ずる源（卵）と同一視されていたようだ。ゆえにその装飾には溢れ出る生命を表したものが多い。そしてその中でも特に大切なのが壺からハスが生まれ出る文様、プルナ・カラサであった。

インド文化省がサポートするサイトで紀元前2世紀の仏塔の装飾文様を閲覧できる。生き生きとした動物や植物が石に刻まれている。どの文様も躍動感があり、デザイン的にも素晴らしいので一部を転載させていただいた。プルナ・カラサ（③④⑤㉒）は他にも8つ紹介されていた。特に大切な文様なのだろう。

壺から命が湧き出る。命の水が湧き出る。プルナ・カラサにはそんなイメージが込められている。

サーンチーの第２仏塔。石の玉垣に様々な文様が彫られている。

出展：①⑰ https://www.greatmirror.com/index.cfm?navid=748

紀元前３世紀にアショーカ王が建てた仏塔が中央インドのサーンチーに現存している。紀元前２世紀以降に増築や玉垣・塔門が追加された。図②～⑯㉒は第２仏塔の玉垣の装飾文様の一部。

③④⑤㉒は壺からハスが生まれ出る文様でプルナ・カラサ（満瓶）と呼ばれる。蕾、開花、葉が彫られ、⑤には鳥も。
②は亀の口からハスが出ているが、左ページの絵㉑とイメージが重なる。よく見ると熱帯スイレンも混じっているように見える。㉑の青いスイレンの球根はまるで壺のようだ。
⑥はマカラ（インド神話に登場する怪魚）。⑦は象。⑧は孔雀。⑨は羽根のあるライオンか。
⑩から⑭はハスの様々な文様。デザインセンス抜群だ。⑮はハスの周りを２種の蔓が蛇のように絡み合う。⑯のハスの周りはトリシューラと呼ばれる三叉文様。三宝（仏、法、僧）を表す。

出展：②～⑯㉒ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049

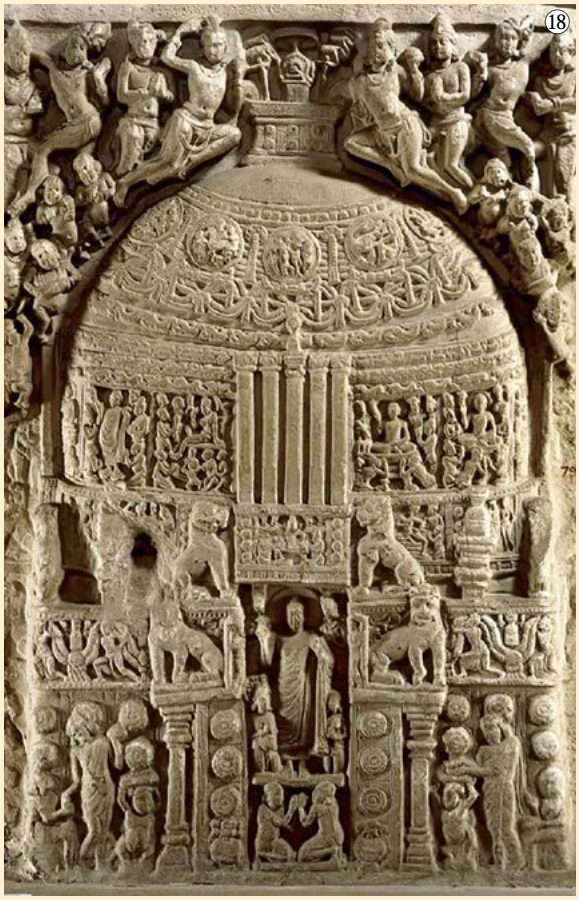
写真⑰は紀元前3世紀に仏教に帰依したアショーカ王が各地に建てた大きな石柱の先端部で、獅子の下にあるのはハスの花（開花して反り返る姿）とされているが、水が壺から溢れ出ている様にも見える。だとすれば、これもプルナ・カラサから湧き出る水が漲る生命を支え養うというメッセージが込められているのではないだろうか。王が感銘を受けた釈迦の教えを、湧き出る水で表現したのでは。

さて古代の仏塔にもどろう。表面の装飾は剥がれているが、その装飾石板（⑱）で仏塔の様子がわかる。そこにはプルナ・カラサがぐるりと取り巻き（⑲）、中央下にも一対のプルナ・カラサが見える（⑳）。実際の仏塔入口にも石のプルナ・カラサが置かれていたのではないだろうか。

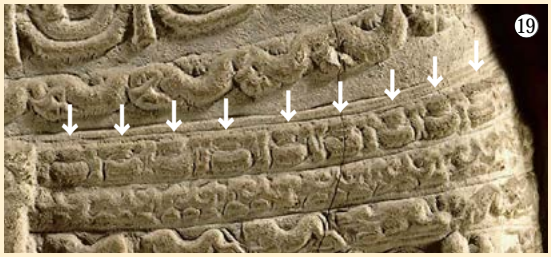
そして気がついた。以前紹介した東大寺大仏開眼供養の一対の供花もプルナ・カラサなのではないだろうか（㉔）。その時導師を務めたのは来日中のインド僧・菩提僊那（ボーディセーナ）である。彼の指導で器を作りハスの造花を立てて一対のプルナ・カラサができあがる。盧舎那仏の前に置かれ、大仏殿に命を吹き込む。生命を生み出す水が満たされた豊穣の壺から花が咲き散華するイメージだ。

あくまでも私の想像である。

⑰
アショーカ王石柱頭部
（サーンチー博物館）


⑱

⑳


⑲

⑱インド南部アマラーヴァティー出土の装飾石板で実際の仏塔が想像できる。部分拡大するとあちらこちらにプルナ・カラサが（⑲⑳）。
出展：⑱⑲⑳ https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1880-0709-79 （大英博物館の公式サイト）

㉔

㉓

㉒

㉑

供花のルーツを探していて古代インドのプルナ・カラサに行き着いた。それは溢れ出る生命の象徴としての壺でありハスであった。

㉑熱帯睡蓮（エジプトロータス）出展：「花の王国１園芸植物」荒俣宏著／平凡社。㉒サーンチー第２仏塔の玉垣装飾。㉓アマラーヴァティー出土の仏塔装飾石板の部分。出展：https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati ㉔「東大寺大仏縁起絵巻」大仏開眼供養の供花。出典：https://www.wikiwand.com/ja/ 東大寺盧舎那仏像

プルナ・カラサの今と昔

仙溪

花と器の図像を探るうちに古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いたが、それは「豊かさと溢れる生命力」を象徴していた。

そのイメージは、私達が器に花をいけた時に「命の輝き」「生命の神秘」のようなものを感じることと、深いところで繋がっているように思う。

手にした花を生かそうと無心になって生けることは、インド哲学的に言えば「小宇宙（個人）と大宇宙（宇宙）の関係」を体感し、それを形にしているとも言い換えられる。

インドでは今もプルナ・カラサは大切なアイテムだ。古典的なインド芸術の8つの縁起の良いシンボルの1つであり、人生の充足と繁栄を象徴している。ヒンドゥー教の家庭では伝統的に儀式や結婚、出産に関連する祭典において崇拝の対象となっている。

ただし、壺から生え出るハスではなく、水を入れた壺にマンゴーの葉を入れ、その上にココナッツが置かれ、花の供物がトッピングされる（図①②）。

壺は地球、子宮、個人、信者の心にたとえられ、水は生命を生み出す創造的な力と見なされ、マンゴーの葉は愛の神カーマを表す豊かさの象徴であり、ときには五感を表す。換金作物のココナッツは繁栄と豊かさ、深い意味では神の頭または意識を象徴する。その固い殻は人に寛容さを与え、成功を達成するために一生懸命働くように促す。ココナッツはまた、寺院の神の前で砕かれ、魂がエゴの殻から抜け出すことを意味しているそうだ。

プルナカラサは、ヒンドゥー教の神話の5つの原始的な要素とも関連付けられる。壺の広い下部は「地」、広がった中央部は「水」、上部または首は「火」、口は「風」を表し、ココナッツとマンゴーの葉は「虚空」を表している。

プルナ・カラサによって人は世界と繋がり、条件付きの存在から解放される。

（参考：「The Conceptual, Cultural and Artistic Significance of Purna-Kalasa and its Use in Hindu and Muslim Architecture of the Subcontinent」Naela Aamir（University of the Punjab, Lahore, Pakistan.））

古代インドの研究者、アグラワラ博士の「プルナ・カラサ」に関する書物（図③）には次のように書かれていた。

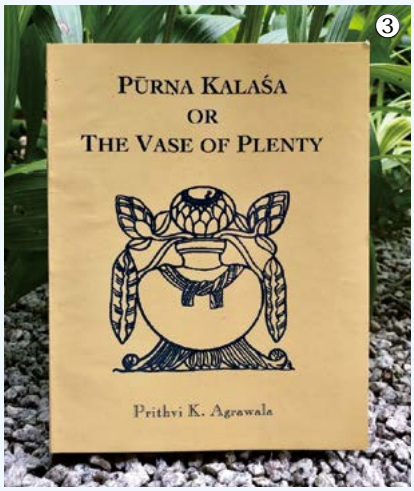
「プルナ・カラサは最も初期の時代から神秘的な生命力の目に見える象徴として、また美と縁起の良い装飾的なモチーフとして人気があり、インド文明の時代を通して存在してきた。」

「崇拝や儀式において神またはゲストにプルナ・カラサを提供するというインドの普遍的な慣習がある。」

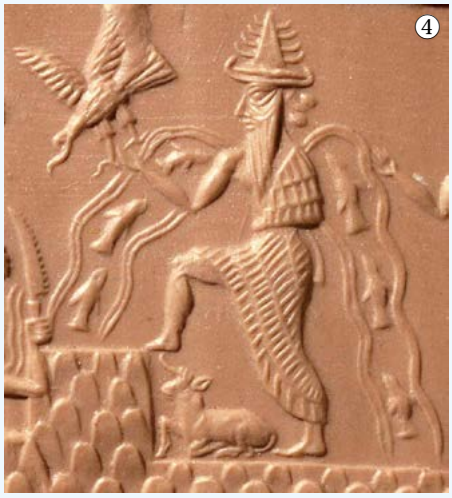
古い時代の叙事詩に、王妃が通る道を金や銀の壺にハスを挿して飾ったという記述もあるそうだ。

そしてこの本の巻末には補足として、プルナ・カラサの起源を考える上で、

現在のプルナ・カラサ。ヒンドゥーの祭典で重要な意味を持つ。出展　図①：https://www.wordz.com/kalash/。図②：https://www.nithyananda.org/photo-gallery/nithyananda-diary-7th-august-2013-photos#gsc.tab=0



「Purna Kalasa or The Vase of Plenty」
Prithvi K. Agrawala 著。



肩から川を出す神「エンキ」が山に足をかけている。円筒印章の印影。前2300年。大英博物館。
出展：図④⑤⑥ https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1891-0509-2553

メソポタミアの「水が溢れ出る壺」が紹介されていた（図⑩）。「グデアのビーカー」と書かれている。

グデアは紀元前22世紀頃、アッカド王国滅亡後のメソポタミア南部ラガシュの支配者で、神に祈るグデア自身の石像が多く見つかっている。その中に水が溢れ出る壺を持ったものもあるのだが（図⑪⑫）、そもそもこの水の表現はシュメール神話に登場する水の神「エンキ」の図像に見られる。

紀元前23世紀の円筒印章（円筒形のハンコ）に、肩から川が湧き出るエンキの姿が彫られている（図④⑤⑥⑦）。

「エンキ」には「地の王」という意味があるそうで、あらゆる生命の源と解釈すると、インドにおけるプルナ・カラサとの繋がりも感じられる。

太古からの清烈な水の流れ。人は水に豊かな生命力の源を感じとり、壺と花の造形を生んだ。過去に自然と人の関係から様々な美が創造されてきた。いけばなもその一つなのだと思う。

※このページの図は古い時代から順番に掲載しています。

円筒印章 ⑤

印影 ⑥

円筒印章（シリンダー・シール）は円筒形の石の表面に図像を彫り、粘土板に回転させて押印する。「Adda」の印章。左から狩猟神、イシュタル、太陽神、エンキ、ウシム。高さ 3.9cm。前 2300 年。シッパル (?)。大英博物館。

エンキが王座に座り、肩から流れ出る川に魚が見える。高さ 3.9cm。前 2250 年。大英博物館。
出展：https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1911-0408-7

「アッカド王シャル・カリ・シャリ」の印影。2 人の英雄が水が湧き出る壺を持つ。スイギュウのいるインダスと、メソポタミアが交流していたことが読みとれる。高さ 3.9cm。前 2217 ～ 2193 年。ルーヴル美術館。出展：https://collections.louvre.fr/ark:/53355/cl010147030

ひざまずく 4 人の英雄。うち 1 人の頭に水が湧き出る壺が見られる。前 2220 ～ 2159 年。アッカド、メソポタミア。高さ 2.8 cm。メトロポリタン美術館。出展：https://smarthistory.org/cylinder-seals/

⑪ ラガシュの王子グデア。農業の女神ゲシュティンアンナに捧げるための、水が湧き出る壺を持つ。前 2120 年頃。ルーブル美術館。⑫ 水の流れに魚が見える。
出展：図⑪⑫ https://collections.louvre.fr/en/recherche?q=Gudea

無限の水が流れ出る壺を示す石灰岩の記念碑の一部。グデアの時代。大英博物館。出展：https://www.britishmuseum.org/collection/search?agent=Gudea
この図像はグデア以前、アッカド王国時代から見られる（図⑧⑨）

日本に来た満瓶　プルナ・カラサ

仙溪

これまで壺から蓮が生え出る図像「プルナ・カラサ（満瓶）」が古代のインドで生まれたことを見て来た。壺に満たされた水は生命の源であり、生え出るハスは力強い生命の象徴であった。

インド、中国、朝鮮、日本と仏教が伝わる中で、満瓶はどうなったのだろう。

仏教が伝わって150年頃の日本に、ハスが生え出る壺の図が存在していた。奈良国立博物館所蔵の国宝「刺繍釈迦如来説法図」（図③）に満瓶に似た図像をみつけた。（図①）。

丸い壺の口にハスの花と葉が見える。壺の飾りもインドのプルナ・カラサに似ている。今まさにハスが生まれ出たという感じがする。刺繍で表現されているのだが、7～8世紀頃の中国仏教に関わりを持ち、日本に伝わったもののようだ。

とても高度な刺繍による仏画（繍仏または繍帳と呼ばれる）で、いつ何処で誰が作らせたのかの記録はない。

樹の下で腰掛ける赤い衣の如来が大きく描かれ、左右に菩薩たち、その上に奏楽天人たち、下方には俗人や比丘（仏教僧）が居並ぶ中で、中央に後ろ向きの女性が立っている。この図の解釈や製作地（日本か中国か）には様々な説があるようで、どの説が正しいのか分からないが、中国史上唯一の女帝である武則天（則天武后）が宮廷工房で作らせたとする大西磨希子氏（仏教大学教授）の説が興味深い。

武則天は690年に皇帝の座につく時、女帝出現を予言した経典があることを理由に自分の正当性を誇示したとされている。その時10人の沙門（仏教僧）の協力を得た記録があり、この図像と一致する。自分が理想的統治者であるというイメージを打ち出すために作らせた繍仏だとするのが大西氏の説だ。702年に日本から遣唐使が長安を訪れ、武則天に拝謁した折に賜ったものと推定しておられる。他の説と比べてみて、一番説得力があるように思う。

後ろ向きの女性のとなりに、花が盛られた水盤（供花）を捧げ持つ僧がいる。武則天（後ろ向きの女性）は中央の弥勒仏（大西説による）に向かい、ハスの生え出る壺を右手に持っている。壺は青いガラス製だろうか。こちらは供花というよりも、清らかな水を弥勒仏に捧げている（もしくは授かった）ような感じだ。命を生み育む、生命の源としての水が、このドラマチックな場面に命を吹き込んでいるかのようだ。

よく似た図像が2～3世紀のインド仏教遺跡から見つかっている（図⑥）。神々がハスの生えた丸い壺を持ち、そこから天界の神聖な水を仏陀の居場所にそそぎ、祝福している。ここではハスの生えた壺は天界の清浄な水を表しているのだろう。

絵の解釈はともあれ、飛鳥時代末期の日本に、プルナ・カラサ（満瓶）に似た図像が存在したのだ。ハスの生える壺の図像は、当時の日本人に何かをもたらしたはずである。

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
赤い紐飾りのある丸いガラス（？）の壺から、ハスの花と葉が出ている。いけばな的に見ると、水際立ったシンプルな生花（せいか）のようにも見える。

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。
後ろ向きの女性（大西説では武則天）がハスの生え出るガラス（？）の壺を釈迦如来（大西説では弥勒仏）に捧げ持っている。その上に植物が生い茂る池のようなものがあるが天界の泉か。手に持つ壺と関連があるのだろうか。

③

国宝「刺繍釈迦如来説法図」。京都・勧修寺（かじゅうじ）に伝えられ、「勧修寺繍帳（繍仏）」の名でも呼ばれる。縦207・横157cm。8世紀。奈良国立博物館。
出展①②③④⑤：https://www.narahaku.go.jp/collection/647-0.html

中央の釈迦如来（大西説では弥勒仏）を囲うように上から六仙人、十二奏楽天人、十四菩薩、十比丘、十二供養者が描かれている。大西説では弥勒菩薩が弥勒如来となって兜率天から現れるという下生信仰にかけて、現世を救う弥勒仏に自分をかさねた武則天の強い意図があったとされている。
座の背には壺の装飾が見える（図④）。天界の浄水が満ちている?。

④

〈情報〉
奈良国立博物館・特別展「奈良博三昧、至高の仏教美術コレクション」
前期展～8月15日に国宝「刺繍釈迦如来説法図」が出品されています。すべての作品が写真撮影可能だそうです。

⑤

国宝「刺繍釈迦如来説法図」の部分。菩薩の一人がハスが挿された水瓶（浄瓶）を持つ。花による供養を表すものか。唐時代の中国で、実際にこのような瓶花がいけられることもあったのだろうか。

【参考】
「奈良国立博物館所蔵　刺繍釈迦如来説法図の主題
ー則天武后期の仏教美術ー」大西磨希子
『仏教史学研究57巻』（仏教史学会）２０１５年３月

⑥

インド、アマラーヴァティー出土の石板。2～3世紀。「菩提樹の崇拝」神々がハスの花が咲く壺を持ち、聖なる木に天界の神聖な水を注いでいる。菩提樹＝仏陀を祝福するとともに、清浄な場所であることを表現しているのだろう。クリーブランド美術館。
出展⑥：https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati

立花時勢粧３３３年

仙溪

江戸時代前期の１６８８年（貞享５年・元禄元年）に桑原冨春軒仙溪の『立華時勢粧』が木版刷りで出版されて今年で丁度３３３年になる。

１１８の絵図からなる『立花時勢粧３巻』と、花材の解説から始まる立花の手引き書『立花秘傳抄５巻』の合わせて８冊からなる花伝書である。

以前この「テキスト」でその膨大な内容を５年半にわたり紹介したが、一つとして同じものの無い絵図には植物の個性と息吹が見て取れ、また様々な故事や書物を引きながらの手引き書は、流祖の豊富な知識を感じると共に、揺るぎない花道理念が伝わってくる。

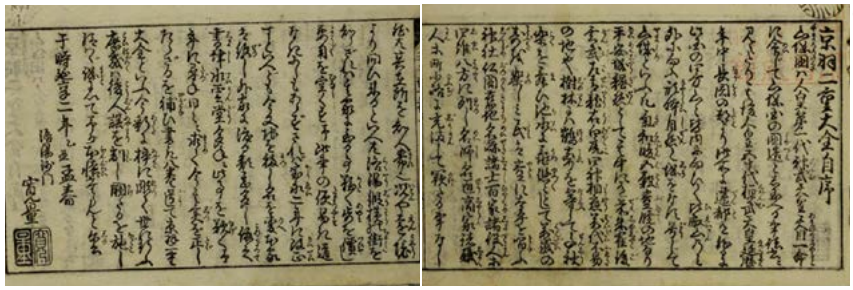
植物を見つめその生命を尊重し、自然の妙を花と共につくることが、桑原専慶流いけばなの根本理念だと気づかされる。

さて、延享2年（１７４５年）の京都案内『京羽二重大全』に「立花師　富春軒桑原仙溪流桑原権左衛門」とあるので紹介しておきたい。

１６８５年の初版以降何度も改正版が出ていて、時代順に見ると流派が増えていく様子がわかる。

「立花時勢粧」３３３年と「テキスト」７００号の節目に、流派の歴史を振り返ってみた。

①

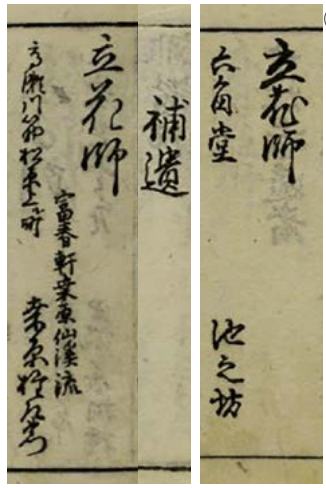


『改正増補・京羽二重大全８巻』延享２年（1745）の巻１序文。

『京羽二重』は京都の実用的な地誌・観光案内で「諸師諸芸」の項目に茶湯者などと共に立花師も紹介されている。
初版（貞享２年（1685））では立花師は「池之坊」と「大住院」だったのが、60年後の改正版（①②）では「池之坊」に「富春軒桑原仙溪流」が加えられている。

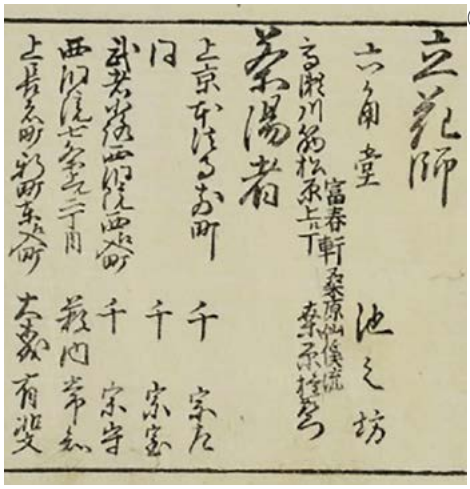
出展①②③④：京都府立総合資料館所蔵（ARC 古典籍ポータルデータベース）
https://www.dh-jac.net/db1/books/results.php?f3= 京羽二重

②



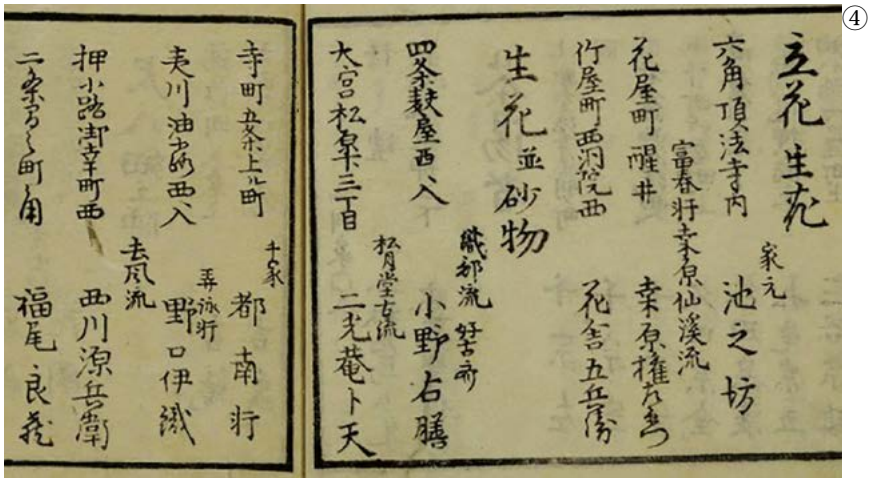
『改正増補・京羽二重大全 巻の三』
延享２年（1745）の部分。
出版間際に富春軒桑原仙溪流が加えられている。５世家元の頃か。

③



『明和新増・京羽二重大全 巻の三』
明和５年（1768）の部分。
延享版に続き「立花師」として池之坊と当流が紹介され、続いて「茶湯者」５人の名があり当時の様子が偲ばれる。

④



『文化増補・京羽二重大全 巻の三』文化７年（1810）の部分
「立花 生花」「生花 並 砂物」に９人を紹介。

文阿弥花伝書

仙溪

縁あって鹿王院で花をいけさせて頂けたので、鹿王院に伝わる『文阿弥花伝書』のことに触れておきたい。

この花伝書（3巻の巻物でおそらく後世に書き写されたもの）は供花の功徳や挿法・飾り方について仮名交じり文で書かれ、所々に彩色の絵図があり、各巻末尾に綉谷庵文阿弥の名がある。

序文に、仏前の供物の中で花を最も尊いものと位置づけ、花を嗜むことで現世で楽しみ来世で救われることができると説いている。

花伝書としては最初期の内容と思われるのだが、詳しい研究がされていないのが残念。ここに序文全文を紹介する。

（『大和文華 第48号』掲載の釈文（読みやすく直した文）を参考にしたが、段落で区切り、仮名を漢字にするなどした。間違いがあればご指摘願いたい。）

序曰

夫れ、この界は須弥の南贍部州、天笠太唐日本三国之に同じ、其の中に於いて我が朝万勝たり。

先ず神国なるがゆえに仏法に近し。諸宗の元祖三国に渡るに、諸経論秘伝尤もこの国に収まるなり。されば日域に生ずる人、知恵のかしこき事万鏡を磨き、心のゆるき事四海に満つ。

しかりといえども、その身の嗜み学する事は身躰に影の応ずるがごとく、心闇々たれば影うつる事なし。玉磨かざれば光なきがごとし。たまたま請けがたき人生を請け、生まれ難き国に生ずる事有り難き宿因と思い、一弾指の間もいたづらに日を送る事なかれ。ここをわきまえざる人はなげかしきや。三界六道に輪廻し悪道に堕せしめん基なるべし。今生後生のために諸芸を嗜むべし。

しこうして仏神三宝に六種の供物あり。その中にとりわき花供尤も勝りたり。又翫ぶ事私ならず、この道に深くわけ入り、深真不思議の信号を六ちんにそみ（六陳に染み？）、教えの如くに翫ぶならば、仏道修行にもここ無二無三の教行にあらずや。

先ず躰色この理をもってとるに、地水火風空の五躰なり。青黄赤白黒、色これに顕れ法報応の三身もこれあり。五音に五の響きまでも顕れたり。そのゆえは五躰六色具足しぬれば、すなわち三身万徳の悟りあり。これを識る事は易かるべきかな。又難かるべきかな。ただすべからく師の伝来をもって教えとす。

心に得たるところをもって悟りと定むべしや。心を千またにわかち、勢を天地に馳せてこの道を心えべき事肝要なり。たとえば万木千草ことごとくもって四季折々の風情をたもつ事、釈尊の深入禅定観見法界、草木国土悉皆成仏と法華経に説きます事も、釈尊一念の上なるべし。森羅万象有情非情の上をなべて草木国土と名をさしてのべ給うと見えたり。何事か疎かならむや。

松杉をしん（西教寺に伝わる文阿弥花伝書には「身」の字が使われている）に用うは真如実相の心と得べし。開落の花は随縁真如の道理と心得べし。又四季に変ぜざる草をば不変随縁とも真如平等とも観すべし。花を翫ぶ事は仏世にたとえば釈尊一代教法には華厳経の説と心得べし。もっとも荘厳第一の

文阿弥花伝書と伝わるものは滋賀の西教寺に7巻、九州国立博物館に残巻1巻、他にもあり、鹿王院のものには天承元年（1131）の日付がある。

『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』図録より（2009）p42-43

鹿王院山門からの長い石畳。苔生した紅葉の林を真っ直ぐな道が続く。清浄な空気に癒やされる。

利益なり。花を挿げる室には諸天来迎あり、天人も影向したまうなり。

春は諸花の開落の枝をまじえ、匂ふんぷんとして袖にうつる事は、栴檀の林に入りてさながら栴檀を翫ぶにことならず。峨々たる枯れ木のこずえは鉾を立てたるがごとし。苔のひまよりみどり少々わひ出、若木をそねむに似たり。沙羅双樹のかり（殯？）に色を変ぜしがごとく。

夏はかきつばた花あやめなど水辺に咲ける趣で、すなわち涼しき事これを思うに江南の野水に戯れるがごとし。

秋は千種の花の朝露にかたぶき、己々の色をうつし、又夕時雨一通りのあとうち湿り、しどろに伏し違うを見るに、などか心を掛けざらん。

冬は山野悉くおしなべて霜雪に草木うづもれ、儚き思いにも堪えぬべきところに、傍らを見れば一もと菊の散り残り、虫の住みかの名残かと哀れなり。

又山橘、深山樒などいうものの実に色をなし、葉に水をふくみ青々明々とある事をみれば、また枯れ果てぬ世の有様と頼みあり。

めづらかに面白き事、いかなる慳貪放逸の人かこれをそねまんや。四季折々の無常を知って、有為の転変を悟らざらんや。生老病死の理をしるべきも、尤もこの一瓶のうちに漏れんや。

道俗男女在家出家貴賤上下ともにこの花を翫びなば、当来にては心を慰み客をもてなし、来世にては仏の会場に往詣して、種々の曼荼羅に座し、種々の花を翫ぶ事疑いあるべからず。

挿げる道より悟りを開かん事決定なるべし。委才覚のおもむき、この一巻のすえに顕了す。ただ古今の師伝にまかせ、かくの如くなるべし。穴賢他見あるべからず。これを秘すべし。

又曰く、花を立つ事、仏在世より今に至るまで戒定恵の三学をしめし給うその第一なり。香花火をもって三学を示し給うと見えたり。

（このあと巻1に72、巻2に67、巻3に9の事柄が書かれている。）

仏教と花の関係

文阿弥花伝書の序文を読んでいて、「仏教」と「花」の関わりについて新鮮な発見をした。

文阿弥は「万木千草ことごとくもって四季折々の風情をたもつ」この世界で、季節の移ろいを感じながら花を挿す行為そのものが「悟り」に繋がる崇高な「嗜み」だと力説している。

仏教の供花がいけばなの源流の1つと分かってはいたが、それは形式だけではなくて花を挿す精神も育んでいたのだ。

仏教僧が釈迦の教えに近付こうと花を挿すうち、花も人と同じなのだと気付きそれこそ釈迦の教えと悟る。花を慈しみその個性を生かすように挿した供花が自分も含めた人々の心を癒やす。そして何より花を挿すことでより良く生きるための道がひらける。日本に生まれてこんなに素晴らしいことをやらないなんてもったいない、と文阿弥は熱く語っている。

花を尊ぶ気持ちが良いいけばなを生むのだと最近つくづく思うようになったが、彼は同じことを書き伝えてくれている。

足利義満筆「鹿王院」の額と客殿。
襖絵の枯葉、屏風絵、花。それぞれが響き合い呼吸する。

鹿王院の舎利殿（現在修復中）。
中に源実朝が宋から招来した仏牙舎利（釈尊の歯）を安置する多宝塔がある。

「文阿弥花伝書」の謎

前回序文を紹介したが、「文阿弥花伝書（鹿王院蔵）」には謎めいた所がある。

文阿弥は室町時代の「たて花」の名手で足利将軍に仕えた同朋衆の一人。

1，巻末の年号と日付の謎

天承元年　五月十三日

天承元年は 1131 年、平安時代だ。5月13日という日は巻3の最後にも「五節花の事」として「五月十三日 竹」とある。これは中国の俗説「竹酔日」のことを指していると思われる。この日は竹が酔っているので植え替えに最適な日とされた。

天承元年を調べてみると、宇治に蟄居していた藤原忠実が鳥羽上皇に呼び戻された年にあたる。

常識的には花伝書の内容が平安時代のものとは考えにくいが、なぜこの年号と日付を敢えて使ったのか。植え替えた竹が根付き育つ如く、挿花の極意を伝授する意味で花伝書相伝の日付としたとも考えられる。

「五月十三日 竹」以外にも「菊ばかり

立てず」と書かれていることなど、他の花伝書には無い内容があり興味深い。

2，「花の書」「紀貫之」「宇治の宝蔵」「玉津島明神」

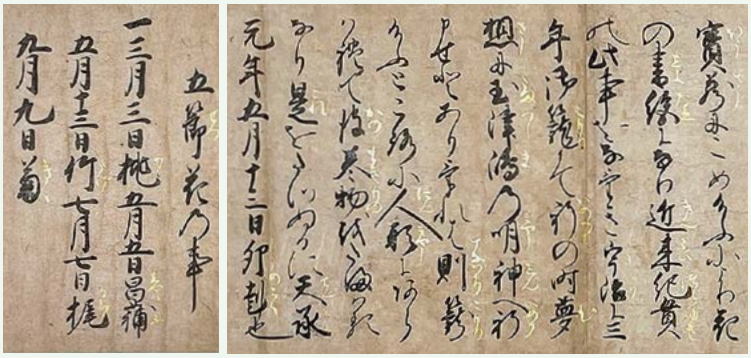
わが朝において、花の書宇治の宝蔵に込めたまうより花の書絶になり、近来紀貫能この事をなげき、宇治に三年お籠候て祈の時、夢想に玉津嶋の明神へ祈申せとありければ、則ち籠給うところに人形にあらわれて彼巻物を賜るなり。これをたづぬるに、天承元年五月十三日卯の刻なり。

巻3に右の文章があり「花の書」なるもののことが書かれている。

紀貫之（872~945）と玉津島明神の関係は能の「蟻通」の中でも語られる。紀の国・和歌浦の玉津島明神は和歌の神様であり、貫之も参詣したであろうことが「貫之集」からうかがえる。その帰途に和泉国の蟻通明神で詠んだ歌を題材に能の「蟻通」がつくられた。

紀貫之の書いた「土佐日記」は和語和文和字による日記文学の魁けである。また彼は古今和歌集の編纂のあと、宮中の書物を管理する御書所預に任ぜられている。日本的なるものを生み出した紀貫之に、宇治の宝蔵で「花の書」を見つけさせたのには、何か意味がありそうだ。

「花の書」とはいかなるものを指すのか。古い時代の供花について、その挿法を記したものだろうか。



『文阿弥花伝書・鹿王院蔵』巻３の部分。㊨花の書について、㊧五節の花に五月十三日竹とある。　『特別展 いけばな 歴史を彩る日本の美』（2009）より

玉津島神社の北西にある雑賀岬展望台に登った。古の「若の浦」もこんな景色だったのでは。

玉津島神社

私も明神様から花道の極意を授かろうと玉津島神社を訪れた。（11月13日）

上古より天照大神の妹神である稚日女尊をご祭神とする。またの御名は丹生都比売神である。

紀ノ川の河口に位置し、潮の干満差が大きく、満潮時には干潟に点在する山が海面に玉のように浮かぶ島となったそうだ。周辺は美しく稚い浜辺「若の浦」と呼ばれたが、聖武天皇によって明光浦と命名、又いつしか「和歌の浦」とも呼ばれるようになる。歌に多く詠まれており、衣通姫尊も祀られるようになってからは和歌三神の一社として崇められてきた。

和歌山市には未知の古墳が多く眠っていると聞く。「花の書」ゆかりの玉津嶋明神について、ますます興味が湧いてきた。

玉津島神社の紋。玉（宝珠）と菊だろうか。白波を白菊と見る和歌がこの地で詠まれている。

羅漢図の挿花

仙溪

羅漢とは「修行を完成し、供養に値する者」を意味する「アルハット」を漢字音で表した「阿羅漢」の略称で、釈迦の入滅後に長寿を保ち法の護持と人々の救済を釈迦から託された16羅漢や、超人的な能力を持つ聖人達のことをさす。

平安時代中期から鎌倉時代に中国から十六羅漢図などと共に羅漢信仰がもたらされた。

平安末期に日本で描かれた十六羅漢図（11世紀）には、ハスの花葉を挿したガラス花瓶を抱え持つ従者が見える（①②）。伝来の絵を元にしたのなら、中国北宋時代にはこのような供花が行われていたものと想像できる。前に紹介した遼の墓所（1116年）に瑠璃瓶に挿された供花の絵が描かれていたことも繋がりを感じるし、日本においては鳥獣人物戯画（平安末～鎌倉初）にハスの供花があり興味深い。

別の羅漢図には蓮池でハスの花葉を採取し、青磁の花瓶に挿して仏に供える場面がある。中国・南宋時代に明州（現在の寧波）で描かれた五百羅漢図・百幅の一つだ（③④）。

明州は古くから海上交易の拠点として栄えた港湾都市で、702年以降の遣唐使船もまずここに上陸して唐の都、長安（現在の西安）を目指した。

唐代後期の廃仏法難以後、戦乱によっても衰退しかけた仏教は、宋代に庇護をうけ再興する。明州には禅僧の栄西や道元も訪れ、大陸の文化を吸収して日本へ持ち帰っている。仏教復興の時代に日本や高麗と交流が続く明州で、この羅漢図百幅は10年以上の歳月をかけて描かれた。

蓮池の描写は南宋の都・杭州（当時は臨安）の西湖を彷彿とさせる。杭州は明州のすぐ隣だ。明州にも東錢湖などハスは身近にあったと思われる。気候おだやかなこの地域（江南地方）では、実際夏にハスを花瓶に挿して供えていたのだろう。彼の地で修行中の栄西や道元もハスを切って花瓶に挿しただろうか。

十六羅漢図（国宝）の一つ。11 世紀。聖衆来迎寺伝来。東京国立博物館蔵。

出典①②：https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100157&content_part_id=016&langId=ja&webView=　e 国宝サイトより転載

五百羅漢図 100 幅の一つ「採蓮」。12 世紀後半、明州の恵安院（東錢湖畔の寺院）に施入。現在は京都大徳寺他に伝来。

出典③④：https://kknews.cc/news/o9ok5b6. html

神の柱・壱岐島

仙溪

正月明けに「天と地を繋ぐ神の柱」の名をもつ島を訪れて神社巡りをしてきた。

対馬とともに古くから大陸との交易の拠点として栄えた壱岐島（長崎県）。中国の歴史書三国志（3世紀）の『魏志』倭人伝にも「一支国」の名で登場する。『古事記』の国生み神話では5番目に生まれ、神々が行き来するための天と地を繋ぐ柱「天比登都柱」であると記されている島だ。島内には150社以上も由緒ある神社が点在し、280基の古墳に加えて弥生時代の遺跡も発掘されている。

南北17キロ、東西14キロの小さな島だが、ほとんどの食材が島内で賄える。海産物、農産物、畜産や養鶏、養殖によって自給自足が可能な恵まれた島だ。想像するに太古より交易の拠点であると共に、豊かな自然の恵みをもたらす神への祈りの場でもあったのだろう。

しかし人や物が行き来する場所は平和な時代はいいが、隣国が領土を広げようとした

内海湾の小島神社。潮が引いたときだけ渡れる。祭神は素戔嗚命。

シマカンギクとクロツバキ。

潮が引くと天然の牡蠣も現れる。島のおばさんが身を採り集めていた。

猿に見える「猿岩」は壱岐島誕生の神話によると島を繋ぎ留めた８本の柱の一つ。

過疎化で空いた畑ではバナナ栽培が。無農薬で皮まで美味しく食べられる。

島内のしめ縄にはヤツデの葉が。ヤツデには魔除けの力があるためか。

白沙八幡神社の鎮守の森は神秘的。写真は威厳あるイヌマキの巨木。

場合は侵略の犠牲にもなる。壱岐には女真族による刀伊の入寇（1019）と元寇襲来（1247・1281）によって蹂躙された苦しみの歴史がある。

しかし現在は自然の恵みに支えられた穏やかな島だ。神への祈りは今も引き継がれ、現職の神職のみで行われる壱岐神楽は秋から冬にかけて島中の神社で奉納されているそうだ。

今回の旅では壱岐の食材を堪能した。クロアワビ、サザエ、クエ、ノドグロ、ミズイカ、壱岐牛、ママなかせ（トマト）などなど。麦焼酎は壱岐発祥だそうだ。最近では地ビールやバナナ栽培も始まっている。

訪れた幾つかの神社では感謝とともに願い事もさせていただいた。断崖で強風を、砂浜で穏やかな波を、鎮守の森で巨木を体感したことも、神の柱の島を印象深くさせる。

目に見えないゆえに畏れ、目に見えないゆえに敬う。神とはそういうものなのだろう。命を育む自然の大いなる力に神を感じる。自然の恵みに感謝し尊ぶ気持ちを忘れずにいたい。壱岐島は神を感じる島であり続けて欲しい。

奈良・平安朝よりの白沙八幡神社、祭神は神功皇后、応神天皇他。拝殿は平戸藩主・松浦鎮信が寄進した36歌仙図に因んだ絵で埋め尽くされている。

先月号で紹介した松浦鎮信縁の地。これも何かのご縁。

島の東端、左京鼻から玄界灘を見る。壱岐島誕生の神話で島を繋ぎ留めた「折れ柱」の一つ「観音柱」が荒波に洗われる。海の向こうには宗像大社の境内地であり「神宿る島」沖ノ島がある。

日本に来た満瓶（まんびょう） プルナ・カラサ②

仙溪

奈良国立博物館所蔵の「胎蔵図像（たいぞうずぞう）」（①②）を見る機会があった。その巻頭にひときわ大きく描かれたハスの生え出る宝瓶（ほうびょう）の絵は、インドのプルナ・カラサ（満瓶）を連想させる。

「胎蔵図像」の原本はインド僧・善無畏（ぜんむい）によって玄宗（げんそう）皇帝の頃に唐（とう）で書かれている。唐の都・長安（ちょうあん）の華やぎを彷彿とさせるような華麗さを感じるが、おそらくこの壺の絵に密教の真理を描ききってあるのではないだろうか。

私の解釈では、壺をのせる逆さの蓮（れん）弁（べん）は大地、それを支える渦巻く水、丸い装飾は火、はためく紐（ひも）には風、球形の壺は水であり虚空（宇宙）であり、そこからハスが生まれ出ている。

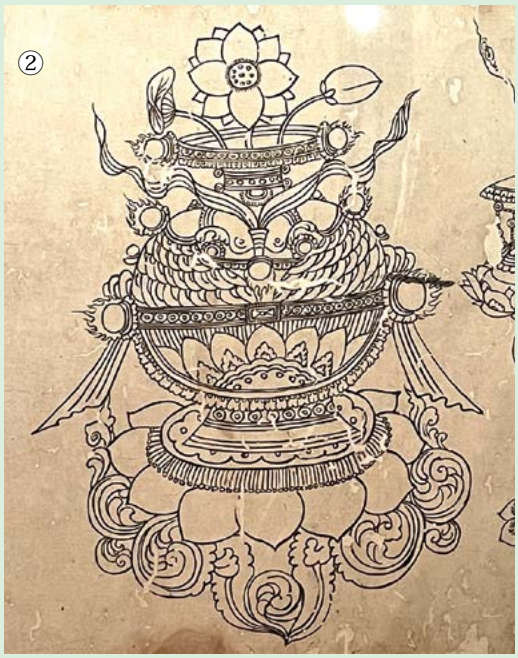
球体はガラスのようで、底にはハスの開花が映り、ハスの花から壺が生じていることを思わせる。上半分には撚（よ）り紐が巻き付くが、龍の鱗（うろこ）のようだなと思って見ていると、中央上部の小さな丸が龍の目に見えてきた。

8世紀初頭、どんな思いをこの絵に込めたのだろう。仏教に詳しくない私には真の意味は分からないが、じっと見ていると、私たちが生きる生命世界の静寂と躍動、内なる神秘と漲（みなぎ）る力が感じられる。

奈良博ではもう一つプルナ・カラサを思わせる壺を見つけた。高さ約60センチの「愛染明王坐像」（③④）は宝瓶から生まれ出た蓮華の上に座る姿。現在日本で視覚できるプルナカラサの一つだと思う。

①

②



「胎蔵図像」（1194）には密教の世界観が絵で表されている。円珍（814~891）が唐より持ち帰ったものの転写本で、その元絵はインド僧・善無畏（シュバカラシンハ637~735）が『大日経』を漢訳する際に描いたとされる。善無畏は中部インド摩伽陀国の国王で、出家後ナーランダー僧院で学んだ密教を唐へ伝えた。

出典①～④:奈良国立博物館「奈良博三昧至高の仏教美術コレクション展」

③

④

「愛染明王坐像」奈良・興福寺伝来。木造 彩色 截金。高さ約60センチ。鎌倉時代。明王が坐す蓮華を生み出すこの壺（宝瓶）も、生命の母胎としてのプルナ・カラサ（満瓶）のイメージと重なって見える。